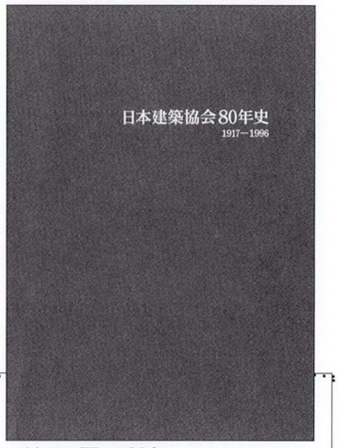


建築と社会 Architecture and Society

特集 Product Design+1
～プロダクトのインテリアデザインへの展開～

日本建築協会

07
2004



「日本建築協会80年史1917-1996」

増刷頒布中　頒価　3,000円

1999年７月に発刊した「日本建築協会80年史1917-1996」は、各方面から好評をいただいておりますが、このたび、皆様の強いご要望により、増刷・頒布することにいたしました。大正６年３月30日に関西建築協会として誕生した日本建築協会の80年の歴史を、様々な事業や委員会活動を通じて、また、本会設立者の片岡安、武田五一以降現在までの会員たちの社会活動を通して知ることができる記念誌として、A4判・240頁にまとめています。

とくに、協会草創期の大正・昭和初期の片岡安ら協会のメンバーと当時の大阪市長・関　一との交流を物語る一文は、大阪の都市計画史、あるいは関西の建築人物誌ともなっています。本会の歴史を知るだけでなく、建築を通して、それぞれの時代の雰囲気を身近に感じることができる大変貴重な資料となるものです。

購入ご希望のかたは、下記要領でお申し込み下さい。

＊

申 込 先　社団法人　日本建築協会
〒530-0001　大阪市北区梅田1-1-3-2100
TEL 06-6348-0635　FAX 06-6348-0634

頒　　価　１部3,000円（税・送料込み）

※増刷部数には限りがございますので、お早めにお申し込み下さい。

「日本建築協会80年史」

A4判・240頁・並製本

●日本建築協会の沿革／委員会活動／「建築と社会」の変遷／大正時代から現在までの本会主催の博覧会・展覧会・講演会／よろず相談住宅展／青年建築家・青年技術者顕彰／工高生デザインコンクール入選者etc.

●日本建築協会創立者と会を支えた38人のプロフィール（片岡　安・設楽貞雄・武田五一・池田　實・波江悌夫・竹腰健造・尾崎久助・東畑謙三・塚本猛次・福田朝生・佐野正一・葛野壯一郎・横濱　勉・松本禹象・宗　兵蔵・園部文雄・日高　胖・野村一郎・古宇田　實・松室重光・松井貴太郎・安井武雄・中澤誠一郎・坂　静雄・今林彦太郎・井上新二・松本儀八・池田宮彦・錢高輝之・中西六郎・大林芳郎・鴻池藤一・伊東五郎・竹中錬一・鷲尾健三・松村雄吉・横尾義貫・足立　孝）

●座談会「戦中から戦後初期の協会活動」―尾亀清四郎・大林芳郎・小西　岬・佐野正一・横尾義貫・三品哲夫の6氏による終戦前後の協会活動の証言―

＊

■執筆ワーキンググループ
坂本勝比古／安達英俊／石田潤一郎／植松清志／梅宮弘光／桐浴邦夫／酒井一光／橋寺知子／山形政昭／吉田高子／和田康由

■80年史編纂委員会
長谷部朔郎／安達英俊／近藤達夫／谷淳之介／十倉　毅／原見昌志／和田康由／吉田悦二



「日本建築協会の遺産と功績」（坂本勝比古）より



「草創期の人々」より片岡安の項

会告

総会議決お知らせ

平成16年６月16日開催の平成16年度第１回通常総会において、下記議案がそれぞれ原案のとおり承認されました。

・第１号議案
　平成15年度事業報告の件(詳細2p)
・第２号議案
　平成15年度収支決算報告の件(詳細3p)
・第３号議案
　役員改選の件

＊６月19日付で退任した理事（敬称略）
　氏原　完典／大成建設㈱
　川村　眞次／㈱関西都市整備センター
　久米　宏和／㈳大阪建設業協会
　小宮　三辰／㈱安井建築設計事務所
　清水義一郎／清水工業所
　畠山　祐治／㈱シンコー
　原田孝太郎／原田セメント化工㈱
　松村　慶三／㈱浦辺設計

＊６月20日付で就任した理事（敬称略）
　木村　之彦／木村工業㈱
　久我　三郎／久我産業㈱
　瀬戸川　葆／関西住宅品質保証㈱
　立成　良三／㈶大阪府住宅センター
　寺下　　均／大成建設㈱
　藤井　　實／エスケー化研㈱
　松岡　憲生／㈱きんでん
　松本壮一郎／愛知工業大学
　前川　　翼／㈳大阪建設業協会

＊６月20日付で再任した理事（敬称略）
　淺沼　誠夫／㈱淺沼組
　井上　　豊／大阪大学名誉教授
　上原　正行／神戸大学
　岡田　聿之／㈱東畑建築事務所
　古原　直人／毎日工業㈱
　古林　敏郎／広島工業大学
　菅谷　　節／ダイダン㈱
　杉山　泰生／事務局
　相馬　一男／住友電設㈱
　任田　　勉／西松建設㈱
　中川　正美／㈱フジタ
　中谷　秀敏／大阪ガス㈱
　中井　　進／㈱日建設計
　浜辺　鶴志／戸田建設㈱
　伴　　昭秀／㈱西原衛生工業所
　広原　盛明／元京都府立大学
　堀田　修二／鹿島建設㈱
　與謝野　久／㈱日建設計
　渡辺　勝紀／㈱熊谷組

＊６月20日付で再任した監事（敬称略）
　前田　隆司／㈱前田商会

・第４号議案
　事務所移転の件(詳細1p)

臨時理事会議決のお知らせ

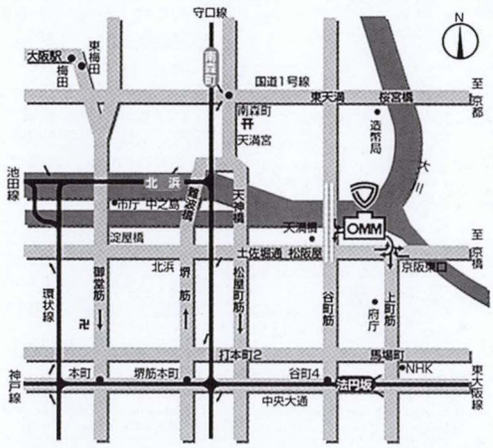
平成16年６月21日開催の平成16年度第１回臨時理事会において、役付役員並びに理事の会務分掌が、Ｐ５の別表のとおり決まりました。

本会事務所移転のお知らせ

日本建築協会の事務所が、大阪マーチャンダイズ・マートビルの７階に移転しました。

大正６年３月30日、事務所を本会創設委員のひとり片岡安の事務所内に置いて発足し、８回の転居を経て近畿建築会館に事務所を構えた本会は、昭和58年12月22日、大阪駅前第３ビルに居を構えました。そして今回11回目の移転になります。

新しい事務所は眼下に大川の流れを臨む所にあり、京阪電車、地下鉄谷町線の天満橋駅に直結しております。現在工事中の京阪新線が開通すれば市内各所からのアクセスも至便の場所となります。



〒540-6591
大阪市中央区大手前
１丁目７番31号
大阪マーチャンダイズ・
マートビル７階Ｂ室
TEL 06-6946-6981
FAX 06-6946-6984

新しい場所で、新しい気持ちで協会活動を推進すべく各委員、事務局員ともども心機一転取り組む所存ですので、会員各位には倍旧のご支援を賜りたく、本誌面をもってお願い申し上げます。

平成15年度事業報告書

平成15年4月1日～平成16年3月31日

1.総　　会

(1) **第1回通常総会**　平成15年6月18日
議事　①平成14年度事業報告承認の件
②平成14年度決算報告承認の件
③役員の選任の件

(2) **第2回通常総会**　平成16年3月24日
議事　①平成16年度事業計画承認の件
②平成16年度収支予算承認の件
③評議員定数改正の件
④名誉正会員推薦の件

(3) **第1回臨時総会**　平成15年11月26日
議事　①運営資金の件
②事務所移転検討の件
③理事補選の件

2.理　　事　　会

(1) **第1回通常理事会**　平成15年6月18日
議事　①平成14年度事業報告承認の件
②平成14年度決算報告承認の件
③役員の選任の件
④各支部の14年度決算承認の件

(2) **第2回通常理事会**　平成16年3月10日
議事　①平成16年度事業計画承認の件
②平成16年度収支予算承認の件
③評議員定数改正の件
④名誉正会員推薦の件

(3) **第1回臨時理事会**　平成15年6月18日
議事　①役付役員選任の件
②常設委員長委嘱の件
③役員の会務分掌の件

(4) **第2回臨時理事会**　平成15年10月28日
議事　①運営資金の件
②事務所移転検討の件
③理事補選の件

3.評　議　員　会

(1) **第1回定時評議員会**　平成15年6月9日
議事　①副議長互選の件
②役員選任候補者について

(2) **第1回臨時評議員会**　平成15年11月15日
議事　①理事補選候補者について
②日本建築協会財政再建策の件

4.役　員　会　等

(1) 正副会長会議　16回
(2) 常任理事会　8回

5.常設委員会等

	委員会	小委員会等
(1) 編集委員会	12回	75回
(2) 事業委員会	6回	24回
(3) 教育委員会	1回	9回
(4) 出版委員会	11回	22回
(5) 建材委員会	4回	

6.特別委員会等

(1) 工高生デザインコンクール審査委員会　1回
(2) 青年技術者選考委員会　1回
(3) 「日本建築協会賞」選考委員会　3回
(4) 「建築と社会」賞選考委員会　1回

7.建築と社会・特集号

4月号　サスティナビリティ～次世代に引き継ぐ都市・建築・暮らしのデザイン～
5月号　建築と五感
6月号　都市計画法及び建築基準法等の改正
7月号　コンバージョンーインテリアから発信するまちなみー
8月号　介護と建築・設備
9月号　建築とノスタルジー～建築の主観的価値について～
10月号　力と楽しくつきあう方法
11月号　私の空間作法ー会員作品ー
12月号　第50回青年技術者＋青年技術者顕彰50年
1月号　大阪市住宅局ー魅力ある大都市居住の実現に向けてー
2月号　都市緑化
3月号　東海支部会員作品2004
愛・地球博～2005年日本国際博覧会のめざすもの～

8.出版及び講座

<プロのノウハウ>シリーズ等
『プロが教えるキッチン設計のコツ』／井上まるみ著

<プロのノウハウ>講座
建物の結露ートラブル事例と解決策
講師　岩崎秀郎／「建物の結露」編集委員・清水建設㈱
6月20日　於協会サロン　受講者38名

9.見　　学　　会

東大阪市総合庁舎見学会
4月9日　参加20名
茶室見学会（第19回）如庵と暫遊荘
5月10日　参加33名
神戸赤十字(新)病院、兵庫県災害医療センター見学会
6月4日　参加22名
住友活機園：伊庭貞剛記念館見学会
6月7日　参加22名
旧村山龍平邸と香雪美術館見学会
11月11日　参加25名
茶室見学会（第20回）片桐石州　慈光院の茶室
12月13日　参加24名
国立国際美術館見学会
2月3日　参加48名
灘浜サイエンススクエア見学会
3月11日　参加20名
堺市立のびやか健康館見学会
3月16日　参加23名

10.情報・研修会

講演会／大阪市中央公会堂ー保存再生の語り尽くせぬ深さ
講師：橋本健治／坂倉建築研究所執行役員
4月3日　現地　参加41名
話題建築を聞く（第35回）梅田ＤＴタワー
講師：門川清行／竹中工務店役員補佐
4月22日　協会サロン　参加29人
これからの建築と社会⑤人と防災未来センター
講師：兵庫県＋昭和設計＋日本設計
5月24日　現地　参加125名
これからの建築と社会⑥リファイン建築へ
講師：青木　茂
9月17日　大阪市中央公会堂　参加100名
話題建築を聞く（第36回）なんばパークス商業棟
講師：大井昇二／大林組
10月23日　現地　参加59名

11.建築工事実務講習会

大阪開催「施工計画」
11月21日　9：00ー17：00　大阪府建築健保会館
講師：仮設・地下工事　有光利治／鹿島建設関西支店
上部工事・工程　池田孝夫／大成建設関西支店
受講者26名
大阪開催「仮設見積、積算業務」
11月27日　9：00ー17：00　大阪府建築健保会館
講師：仮設見積　阪井　聡／大林組本店
積算業務　高熊　満／竹中工務店大阪本店
受講者12名
東海支部主催「施工計画、仮設見積、積算業務」
1月29日 9：00ー17：00　昭和ビル
講師：施工計画　森　良次／清水建設名古屋支店
仮設見積　堀　政広／大林組名古屋支店
積算業務　佐野洋治／竹中工務店名古屋支店
受講者67名

12.新建材の頁

建材委員会事業として、会誌「建築と社会」の紙面を活用してリウッド（再生木）等新建築素材の特性、市場への展開等の紹介を行った。

13.コンクール

第49回工高生デザインコンクール
設計課題：学校に建つメディアセンター
応募学校数：22校　応募作品数：85点
審査会：10月18日　表彰式：11月15日
審査委員長：塘　伸夫／東畑建築事務所
入選作：10点（うち最優秀1点、優秀2点）

14.表彰状授与

全国の工業高等専門学校、高等学校、専修学校などの建築科の優秀卒業生に対し、学校長の推薦により、本会会長の表彰状を授与。15年度は199校を対象に201名を表彰した。

15.後援・協賛等の承認

- 「第10回大阪ふれあうまちづくり賞」に対する協賛
- 「A／E／C SYSTEMS JAPAN 2003」開催に対する協賛
- 第23回大阪都市景観建築賞（大阪まちなみ賞）に対する協賛
- 「国際デザイン交流会議2003」開催に対する協賛
- 「第19回睡眠環境シンポジウム」開催に対する協賛
- 第27回人間ー生活環境系シンポジウム開催に対する協賛
- 「Asia Builders' Week 2003」に対する協賛
- ジャパンストーンフェア・インターナショナル2003に対する協賛
- 「エコウイルハウス」コンセプトコンペティションに対する後援
- 「ザウアーブルッフ氏講演会」に対する後援
- 「建築・建材展2004」に対する協賛
- 平成16年度1級・2級建築施工管理技術検定試験受験準備講習会開催に伴う協賛
- シンポジウム「ガラスの地球を救う」建築の取り組みーその考え方と実施例に対する協賛
- 阪急歴史街道フィールドセミナー「モダン建築再見シリーズ」開催に対する後援
- 「ATC関西学生卒業作品展vol.9」開催に対する後援
- 「トータルソリューション＆蓄熱空調フェア2004」開催に対する協賛

16.青年技術者の顕彰

昭和29年から本顕彰を実施しており、第50回は応募者35名のうち19名を顕彰した。

17.読者と選ぶ「建築と社会」賞の顕彰

平成12年度から本顕彰を実施しているが、平成15年度第4回は作品2点、論考2点の計4点を顕彰した。

18.図　書　の　閲　覧

本会所蔵の貴重な図書および資料を的確な管理に努めながら会員等への公開閲覧に供した。

19.合同忘年懇親会等

建築関係団体合同忘年懇親会
15年度は大阪建築士事務所協会が当番会として下記のとおり開催した。
12月12日　18：00～19：30　太閤園
建築関係団体合同新年交礼会
15年度は(社)大阪建築設備設計事務所協会が当番会となり、下記のとおり開催した。
1月5日　14：30～15：30　マイドーム大阪

20.本会が入会している団体

大阪商工会議所
大阪市街地再開発促進協議会
大阪市北区納税協会
大阪市防火管理協会
民間（旧四会）連合協定工事請負契約約款委員会

21.役員を送っている団体

大阪商工会議所	2号議員
大阪市街地再開発促進協議会	理事
日本建築総合試験所	理事
大阪建築防災センター	理事
大阪住宅センター	理事
国際デザイン交流協会	評議員

22.建　築　ク　ラ　ブ

会員の有志で組織する「建築クラブ」は15年度は計9回大阪全日空ホテルにおいて朝食会ならびに講演会を開催した。また、1月には新年懇親会を開催した。

平成15年度決算報告書

収支計算書

平成15年４月１日～平成16年３月31日

（単位：円）

Ⅰ．収入の部			
勘定科目	予算額	決算額	差引過不足額
1 会費収入	63,519,000	62,757,426	761,574
個人正会員	20,952,000	21,388,990	△ 436,990
個人正会員（地方）	1,575,000	1,382,850	192,150
団体正会員	40,975,000	39,966,686	1,008,314
準会員	17,000	18,900	△ 1,900
2 事業収入	51,630,000	37,793,671	13,836,329
会誌収入	40,000,000	27,945,797	12,054,203
契約約款収入	2,600,000	2,765,020	△ 165,020
会員名簿収入	4,000,000	3,589,040	410,960
出版委員会収入	1,000,000	1,048,836	△ 48,836
事業委員会収入	1,200,000	851,500	348,500
教育委員会収入	2,000,000	921,743	1,078,257
建材委員会収入	0	0	0
記念事業取崩収入	300,000	0	300,000
受託事業収入	0	0	0
事業雑収入	530,000	671,735	△ 141,735
3 寄付金収入	0	8,000,000	△ 8,000,000
4 雑収入	440,052	251,155	188,897
5 雑収入（退職引当法定取崩）	1,271,948	0	1,271,948
6 前受金収入	0	26,784,880	△ 26,784,880
7 仮受金収入	0	707,433	△ 707,433
当期収入合計（A）	116,861,000	136,294,565	△ 19,433,565
前期繰越収支差額	0	−1,186,771	1,186,771
収入合計（B）	116,861,000	135,107,794	△ 18,246,794
Ⅱ．支出の部			
勘定科目	予算額	決算額	差引過不足額
1 事業費	48,650,000	36,926,772	11,723,228
会誌発行費	40,000,000	30,140,354	9,859,646
契約約款費	1,400,000	1,367,188	32,812
会員名簿発行費	3,000,000	2,517,937	482,063
出版委員会事業費	300,000	160,572	139,428
事業委員会事業費	1,200,000	920,232	279,768
教育委員会事業費	2,000,000	1,425,693	574,307
建材委員会事業費	0	0	0
記念事業費	300,000	19,300	280,700
受託事業費	0	0	0
事業雑費	450,000	375,496	74,504
2 管理費	80,209,000	86,312,163	△ 6,103,163
給与・手当	42,107,000	36,963,313	5,143,687
退職金	16,337,000	28,700,822	△ 12,363,822
福利厚生費	4,733,000	4,281,358	451,642
小計	63,177,000	69,945,493	△ 6,768,493
支部助成費	3,000,000	2,979,640	20,360
会議費	840,000	911,580	△ 71,580
旅費・交通費	50,000	64,100	△ 14,100
通信運搬費	600,000	538,330	61,670
集金費	1,500,000	1,101,725	398,275
消耗品費	1,500,000	1,557,841	△ 57,841
修繕費	50,000	0	50,000
印刷製本費	80,000	78,750	1,250
光熱費	320,000	302,725	17,275
火災保険料	16,000	15,960	40
租税公課	3,000,000	2,545,200	454,800
清掃費	183,000	182,700	300
建物管理費	4,093,000	4,092,792	208
雑費	1,800,000	1,995,327	△ 195,327
小計	17,032,000	16,366,670	665,330
3 予備費	150,000	0	150,000
4 中期国債ファンド費用支出	0	38	△ 38
5 前払費用支出	0	580,209	△ 580,209
6 仮払金支出	0	516,757	△ 516,757
小計	150,000	1,097,004	△ 947,004
当期支出合計（C）	129,009,000	124,335,939	4,673,061
当期収支差額（A−C）	−12,148,000	11,958,626	△ 24,106,626
収支差額（B−C）	−12,148,000	10,771,855	△ 22,919,855
次期繰越収支差額（B−C）	−12,148,000	10,771,855	△ 22,919,855

正味財産増減計算書

平成15年４月１日～平成16年３月31日

（単位：円）

科目	金額
Ⅰ．増加の部	
1．資産増加額	
中期国債ファンド増加額	38
前払費用増加額	580,209
仮払金増加額	516,757
当期収支差額	11,958,626
小計	13,055,630
2．負債減少額	
退職給付引当金減少額	27,000,196
小計	27,000,196
合計	40,055,826
Ⅱ．減少の部	
1．資産減少額	
ソフトウエア減少額	66,255
建物資産減少額	3,822,400
小計	3,888,655
2．負債増加額	
前受金増加額	26,784,880
仮受金増加額	707,433
小計	27,492,313
合計	31,380,968

当期正味財産増減額　8,674,858円
前期繰越正味財産額　109,815,593円
期末正味財産合計額　118,490,451円

貸借対照表

平成16年３月31日現在

（単位：円）

科　目	金　額	科　目	金　額
Ⅰ．資産の部		Ⅱ．負債の部	
【流動資産】	41,889,444	【流動負債】	82,152,361
現金・預金	34,008,224	未払金	29,663,714
未収入金	6,427,345	前受金	51,131,914
前払費用	813,453	仮受金	1,356,733
仮払金	640,422	【固定負債】	19,318,968
【固定資産】	178,072,336	退職給付引当金	19,318,968
有形固定資産	174,583,260		
土地	59,800,000	【負債合計】	101,471,329
建物	114,672,000		
什器	111,260	Ⅲ．正味財産の部	
無形固定資産	226,371		
ソフトウェア	226,371	【正味財産】	118,490,451
その他固定資産	3,262,705		
記念事業積立預金	2,821,953		
中期国債ファンド	440,752		
資産合計	219,961,780	負債及び正味財産合計	219,961,780

（注）減価償却累計額は77,449,300円

計算書類に対する注記

1．重要な会計方針

(1)固定資産の減価償却方法について

・有形固定資産：定額法

・無形固定資産：定額法

(2)引当金の計上基準について

・退職給付引当金

期末退職給与の要支給額を引当てている。

(3)資金の範囲について

・資金の範囲には、現金、預金、未収入金及び未払金を含めている。

(4)消費税等の会計処理について

消費税等の会計処理は税込み方式によっている。

2．次期繰越収支差額の内容は、次のとおりである。

科　目	前期末残高	当期末残高
現金預金	21,640,677	34,008,224
未収入金	4,156,120	6,427,345
合　計	25,796,797	40,435,569
未払金	26,983,568	29,663,714
合　計	26,983,568	29,663,714
次期繰越収支差額	−1,186,771	10,771,855

3．有形固定資産の取得価格、減価償却累計額及び当期末残高は次のとおりである。

科　目	取得価額	減価償却累計額	当期末残高
建　物	191,120,000	76,448,000	114,672,000
什　器	1,112,560	1,001,300	111,260
合　計	192,232,560	77,449,300	114,783,260

4.借入限度額

借入限度額は、30,000,000円である。

今期は、借入限度額の範囲内の10,000,000円（利息3.875%）の借入を実行した。

当該金利236,746円は、雑費の中に入れている。

なお、借入金額10,000,000円は、今期末にすべて返済済みである。

財産目録

平成16年３月31日現在

（単位：円）

科　目	金　額
Ⅰ．資産の部	
1．流動資産	41,889,444
【現金・預金】	34,008,224
現金手元有高	46,185
中央三井信託銀行梅田支店	92,485
三井住友銀行大阪中央支店	7,214,616
UFJ銀行瓦町支店	12,826,042
りそな銀行北浜支店	5,089,078
郵便振替　00910−9−39975	7,704,811
普通預金第２ビル内郵便局	1,007
定額預金第２ビル内郵便局	34,000
定期預金三井住友銀行大阪中央支店	1,000,000
【未収入金】	6,427,345
会誌収入	3,352,500
雑事業収入	500,000
会員名簿収入	73,500
個人正会員会費収入	2,287,000
地方会員会費収入	101,850
団体正会員会費収入	112,495
【前払費用】	813,453
助成費	813,453
【仮払金】	640,422
切手・はがき代	142,364
朝食会外立替（建築クラブ）	498,058
2．固定資産	178,072,336
【有形固定資産】	174,583,260
土地　北区梅田1−1−3	59,800,000
建物　大阪駅前第3ビル	114,672,000
什器　書棚一式	111,260
【無形固定資産】	226,371
ソフトウェア	226,371
【その他固定資産】	3,262,705
記念事業積立預金	2,821,953
三井住友銀行大阪中央支店	2,821,953
国債ファンド　UFJつばさ証券	440,752
資産合計	219,961,780
Ⅱ．負債の部	
1．流動負債	82,152,361
【未払金】	29,663,714
会誌発行費	3,646,866
会員名簿発行費	9,450
退職金	25,384,599
助成費	95,099
集金費	129,300
租税公課	398,400
【前受金】	51,131,914
個人正会員会費収入	6,753,684
団体正会員会費収入	37,779,280
地方会員会費収入	491,400
準会員会費収入	8,400
会誌収入	99,150
区分所有不動産売却手付金	6,000,000
【仮受金】	1,356,733
３月分給与源泉税預かり	45,570
３月分報酬源泉税預かり	187,813
建築クラブ年会費外預かり	1,081,750
誤振込預かり分	41,600
2．固定負債	19,318,968
退職給付引当金	19,318,968
負債合計	101,471,329
Ⅲ．正味財産の部	
正味財産	118,490,451
負債及び正味財産合計	219,961,780

平成16年度

日本建築協会役員会務分掌（敬称略）

名誉会長	佐野　正一／㈱安井建築設計事務所	
名誉会長	市川　　宏／㈱東畑建築事務所	
名誉顧問	薬袋　公明／㈱日建設計	
会　　長	佐野　吉彦／㈱安井建築設計事務所	
副 会 長	井上　　豊／大阪大学名誉教授	編集・研修担当
副 会 長	川口　順弘／㈱竹中工務店	企画・財務担当
副 会 長	髙木　嗣郎／㈱大林組	会勢・事業担当
副 会 長	中谷　秀敏／大阪ガス㈱	総務・事務局担当
副 会 長	中井　　進／㈱日建設計	編集・研修担当
副 会 長	松岡　憲生／㈱きんでん	会勢・事業担当

理事（○印は常任理事）

（総務） 6名
- 大林　剛郎／㈱大林組
- 栗原　信英／栗原工業㈱
- ○鈴木　映男／㈶日本建築総合試験所
- 立野　純三／㈱ユニオン
- 伴　　昭秀／㈱西原衛生工業所
- 松村　雄吾／㈱松村組

（財務） 4名
- 奥村太加典／㈱奥村組
- 木村　之彦／木村工業㈱
- 相馬　一男／住友電設㈱
- 松丸　哲也／豊國建設㈱

（編集・出版） 9名
- ○上原　正行／神戸大学
- 岡田　聿之／㈱東畑建築事務所
- 久我　三郎／久我産業㈱
- 佐藤友美子／サントリー㈱不易流行研究所
- ○設楽　貞樹／㈱安井建築設計事務所
- 竹中　統一／㈱竹中工務店
- 立成　良三／㈶大阪府住宅センター
- 広原　盛明／元・京都府立大学
- 堀田　修二／鹿島建設㈱

（会勢） 12名
- 淺沼　誠夫／㈱淺沼組
- 古原　直人／毎日工業㈱
- 小橋　鴻三／清水建設㈱
- 古林　敏郎／㈳広島県建築士会
- 鴻池　一季／㈱鴻池組
- 菅谷　　節／ダイダン㈱
- 錢高　善雄／㈱錢高組
- 浜辺　鶴志／戸田建設㈱
- 藤井　　實／エスケー化研㈱
- 松本壮一郎／愛知工業大学
- 前川　　翼／㈳大阪建設業協会
- 與謝野　久／㈱日建設計

（事業） 7名
- 北山　啓三／大阪市住宅局
- 川本　得信／都市再生機構
- 城口　俊雄／㈱大阪城口研究所
- ○瀬戸川　葆／関西住宅品質保証㈱
- 任田　　勉／西松建設㈱
- 中川　正美／㈱フジタ
- 渡辺　勝紀／㈱熊谷組

（研修） 7名
- 岩橋　貞雄／八千代電設工業㈱
- ○片倉　健雄／元・近畿大学
- 阪倉　嘉一／大阪府建築都市部
- 寺下　　均／大成建設㈱
- 永原　義夫／王建工業㈱
- 千種　幹雄／㈱昭和設計
- 和田　克朗／㈶日本建築センター

常務理事　杉山　泰生

（監事）　本郷　　聰／㈱松村組　　前田　隆司／㈱前田商会

平成16年度

日本建築協会評議員（敬称略）

議　長　三木　敏男／㈱サングローブ
副議長　得田　芳宏／㈱松村組

本部所属評議員

（技術部門）
- 三木　敏男／㈱サングローブ
- 村上幸三郎／村上デザイン事務所
- 山形　政昭／大阪芸術大学

（総合部門）
- 木村　修治／㈱奥村組
- 小西　和一／㈱錢高組
- 後藤　正孝／三井住友建設㈱
- 笹本　孝史／㈱鴻池組大阪本店
- 高木　敏文／鉄建建設㈱
- 得田　芳宏／㈱松村組
- 中窪　義征／㈱淺沼組
- 野村　俊明／安藤建設㈱
- 宗田　奎二／㈱竹中工務店
- 森井　繁夫／㈱大林組
- 山本　清彦／戸田建設㈱
- 和田　哲郎／飛島建設㈱
- 今西　邦夫／㈱今西組
- 中道　正伸／㈱中道組
- 原　　眞一／コーナン建設㈱
- 森本　晴夫／三和建設㈱

（電気部門）
- 浅海　伸之／浅海電気㈱
- 足高　晴夫／㈱きんでん
- 大久保　喬／近畿工業㈱
- 嘉納　秀一／三宝電機㈱

（管工部門）
- 田中　達夫／㈱精研
- 永島　浩司／須賀工業㈱大阪支社
- 春木　雄一／㈱三晃空調大阪本店
- 東本　昴一／㈱朝日工業社大阪支社

（建材部門）
- 月城　則男／新東洋合成㈱
- 深江　隆司／アスワン㈱
- 古元　眞美／㈱シブタニ
- 山中　豊茂／㈱山中製作所

支部所属評議員

（京都支部）
- 上林　研二／㈱地域生活空間研究所
- 長瀬　博一／長瀬建築研究所
- 森島　照雄／森島建築設計事務所
- 山田　昌次／花豊造園㈱

（中国支部）
- 井上　弘美／アオケン㈱
- 国沢　幹男／日本住宅パネル工業協同組合
- 嶋津　孝之／広島大学
- 村重　保則／現代建築設計事務所㈲

（東海支部）
- 小宮　三辰／三辰設計事務所
- 後藤　利秋／㈲和光建築計画研究所
- 鈴木　慶智／㈱伊藤建築設計事務所
- 寺本　英一／㈲T.R.A
- 中村　哲士／元・安井建築設計事務所
- 林　　金之／愛知工業大学
- 森田富士男／㈲シード
- 芳山　明久／元・㈱ＩＮＡＸ

（和歌山支部）
- 岩脇　伸行／環境建築計画
- 北山　泰秀／㈱北山組

平成16年度

日本建築協会支部長（敬称略）

京　都　望月　秀祐／モチケン・コーポレーション
中　国　古林　敏郎／広島工業大学講師（非常勤）
東　海　松本壮一郎／愛知工業大学
和歌山　東野　信義／東野建築設計事務所

平成16年度

日本建築協会委員

平成16年４月28日開催の常任理事会において、下記のとおり各委員会委員を委嘱いたしました。

（敬称略　◎印委員長　○印副委員長　△印幹事　☆顧問　　職場名は略称を用いました）

■編集委員会

会誌「建築と社会」の企画・編集

◎設楽　貞樹／安井建築設計事務所

■特集小委員会

計画分科会

（計画系）

飯田　　匡／大阪大学大学院
伊縫　憲幸／日建設計
鈴木　克彦／京都工芸繊維大学大学院
田中　直人／摂南大学
高橋　和也／大阪市計画調整局
辻　　武之／阪急不動産
△紅谷　昇平／UFJ総合研究所
松田奈緒子／京都工芸繊維大学大学院院生
三宅　次郎／阪神電気鉄道
森　　康郎／竹中工務店
吉村　英祐／大阪大学大学院

（建築計画系）

荒木　宏之／大成建設
江副　敏史／日建設計
奥村　朋孝／鴻池組
菅野　忠司／鹿島建設
木多　彩子／摂南大学
楠　　敦士／安井建築設計事務所
小林　優子／UR設計
△桜井　則雄／大林組
笹村　欽也／東畑建築事務所
静　　茂夫／大建設計
所　　千夏
野田　隆史／竹中工務店

（インテリア・住宅系）

阿部　泰造／都市再生機構
加藤　　力／宝塚造形芸術大学
黒栁　　亮／竹中工務店
高野　直樹／安井建築設計事務所
△田中　浩介／積水ハウス
戸井賢一郎／日建スペースデザイン
西田　和子／大林組
ペリー史子／大阪産業大学
本山　　仁／松下電工

構造分科会

稲田　竜也／デザイン・構造研究所
大氏　正嗣／デザイン・構造研究所
大住　和正／大林組
木下　隆嗣／東畑建築事務所
白髪　誠一／北條建築構造研究所
田渕　勝道／竹中工務店
永原　吉浩／鴻池組
難波　　尚／神戸大学
△肥島　好浩／ZEN建築構造事務所
向井　洋一／大阪大学大学院
安田　拓矢／安井建築設計事務所
山本　健二／日建設計

設備分科会

△梶井　宏修／近畿大学
河井　康人／関西大学
河津　隆之／河津隆之事務所
近藤　国夫／きんでん
近藤　正一／大阪市住宅局
多賀　浩三／大阪市建築技術協会
田ノ畑好幸／竹中工務店
谷野　太志／新菱冷熱工業
桝井　貴廣／総合設備コンサルタント
松浦　　肇／安井建築設計事務所
村上幸三郎／村上デザイン事務所

施工材料分科会

植田　　実／清水建設
竹中　秀文／大林組
太刀川丈爾／竹中工務店
　　／大成建設
平田　茂良／大和ハウス工業
平野　　剛／鹿島建設
△吉田　正友／日本建築総合試験所

法令分科会

坂中　信隆／大阪市住宅局
鶴田　和幸／大阪府建築都市部
野村　　彰／京都府土木建築部
溝上　省二／京都市都市計画局
△山口　一郎／兵庫県県土整備部まちづくり局
山根　正利／神戸市都市計画総局

■作品作風小委員会

赤木　　隆／日建設計
石塚なぎさ／大阪府建築都市部
居内　章夫／徳岡昌克建築設計事務所
井上　雅祐／大林組
池上　　明／エーアイアーキテクトスタジオ
川上比奈子／夙川学院短期大学
倉渕奈千子／田中啓文総合建築研究所
澤田　純一／兵庫県県土整備部まちづくり局
寺岡　宏治／安井建築設計事務所
鞆野　淳司／竹中工務店
○中村　文紀／東畑建築事務所
林　　孝司／清水建設
前川　治彦／前川治彦建築研究所
増田　敬彦／増田敬彦一級建築士事務所
山田　俊紀／昭和設計

■広告企画小委員会

荒木　俊明／鴻池組
石塚　俊明／松村組
大竹　賢次／大成建設
斉藤　治久／昭和設計
竹内　健介／竹中工務店
前田　　衛／日建設計
横田　和生／大林組
○渡邉　浩文／安井建築設計事務所

■事業委員会

見学・講演・説明・展示・懇親会・若い会員の集いなどの企画および実施

◎瀬戸川　葆／関西住宅品質保証
○原見　昌志／元安井建築設計事務所
○南　　次郎／元淺沼組
○米井　　寛／東畑建築事務所

■情報見学小委員会

○松浦　剛士／清水建設
△赤松　千州／竹中工務店
△伊藤　　博／元松村組
△大喜多孝哉／大林組
△小林　一成／鴻池組
△坂田　雄二／竹中工務店
△中西　　稔／ジェイアール西日本コンサルタンツ
△福家　　敬／元大阪府
△松浦　範明／大林組
△森田　芳次／安井建築設計事務所
岡本　　隆／日建設計
川東　　隆／日建設計
佐々木　栄／昭和設計
雑賀　俊至／きんでん
田崎　祐生／大阪青山短期大学
塘　　伸夫／東畑建築事務所
福島　　隆／鹿島建設
杢谷　通夫／大成建設

■若い会員の集い小委員会

○杉本　真一／大阪芸術大学
△石井　太志／昭和設計
△阪田　弘一／京都工芸繊維大学
△吉武　宗平／ヘッズ
青田有里子／島隆男建築研究所
有田　吉弘／阪急不動産
河合　哲夫／竹中工務店
小林　広英／京都大学
佐々木晴子／大阪市住宅局
杉山　美納／東畑建築事務所
田畑　重明／坂倉建築研究所
龍野　豪利／大阪市教育委員会
樋上　新治／都市プランナーズオフィス
松隈　　章／竹中工務店
廻　はるよ／廻はるよ建築＋デザイン事務所
山隈　直人／kt一級建築士事務所
山田　和弘／N.Y.総合事務所
吉川　　雅／アトリエJIGSAW

■出版委員会

建築に関する図書の企画・編集・刊行、ならびに講座の企画・実施

◎上原　正行／U建築工房
荒川　治徳／荒川建築技術コンサルタント
井上まるみ／住まいの研究室
植村　典人／大阪府立今宮工業高校
川戸　敏雄／近畿大学
河田　康夫／竹中工務店
神田　暢子／神田建築工房
田中　正司／鹿島建設
谷川　康信／大阪工業技術専門学校
○中川　　徹／清水建設
峯松　秀吾／三協アルミニウム工業
☆山田　　修／修建築事務所

■教育委員会

建築教育についての調査・研究、講習会の企画・実施ならびに工高生デザインコンクールなどの企画および実施

◎片倉　健雄／元近畿大学

■講習会小委員会

○藤井　孝晏／大林組
有光　利治／鹿島建設
梶川　賢一／大成建設
佐貫　　久／神戸大学大学院
白塚　芳郎／鴻池組
田中克治郎／錢高組
田堀　富造／松村組
水野　貴夫／清水建設
八木　博嗣／竹中工務店
山内　博記／淺沼組

■工高生教育小委員会

○和田　康由／大阪市立都島第二工業高校
△植松　清志／大阪人間科学大学
大西　正宜／大阪府立西野田工業高校
岡本　展好／大阪市立都島工業高校
小池　啓夫／日建設計
小山　将史／堺市立工業高校
神野　　茂／堺市立工業高校
武田　雄二／愛知産業大学
出雄　　隆／大阪市立工芸高校
永島　敏郎／安井建築設計事務所
山岡　　徹／堺市立工業高校
吉井　和男／東畑建築事務所

■建材委員会

建材コンサルタント・新建材の紹介

◎鈴木　映男／日本建築総合試験所
岡平　博明／奥村組
菅　　知史／鹿島建設
川上　宏伸／大林組
河津　龍大／日本建築総合試験所
阪本　重信／大成建設
徳山　正司／錢高組
仲西孝子郎／日建設計
西出　　浩／大建設計
松本　　章／東畑建築事務所
三井　　実／大阪府建築都市部
森川　　務／竹中工務店
安野　明男／都市再生機構
和田　克朗／日本建築センター

■企画委員会

協会の今後の運営を検討、審議

◎片倉　健雄／元近畿大学
鈴木　映男／日本建築総合試験所
得田　芳宏／松村組
松村　慶三／浦辺設計
三木　敏男／サングローブ
和田　克朗／日本建築センター

若き創造者たちへ

「建築と社会」平成16年12月号

「第51回青年技術者特集号」へのおさそい

日本建築協会誌「建築と社会」は毎年「青年技術者特集号」を企画し、すでに50回にわたって若き優秀なプランナー、アーキテクト、エンジニアをめざす人たちを紹介してきました。

今回も、青年技術者選考委員会を設けて、青年技術者を選考いたしますが、昨今の建築に携わる技術者の多様化を考慮し、設計だけに限らず、計画、構造、設備、施工およびその他広く、建築に関連する分野から、優秀な青年技術者を募って、その不断の研究努力とすぐれた実績への情熱などを、「建築と社会」に掲載し、顕彰することにしております。

51回の企画にあたり、日常目立たない対象の実績も含めて、優秀な実績を積まれている青年技術者のみなさまのご応募をお待ちしております。

応募提出規定

1．応募される人は満35歳（平成13年9月末）までの青年技術者であって、本会個人会員に限る。

2．原則として、本会会員であるすいせん者を通じて応募する。

すいせん者は被すいせん者（青年技[illegible]る組織の上司か上長とする。すいせん[illegible]である場合はこの限りでない。また[illegible]代表者である場合は自せんとする。

3．応募[illegible]い。応募者は、たとえば計画、一般設計、[illegible]インテリア設計、構造、設備、施工、技術開発、行政、情報、コーディネート等々その他の分野にあって、なしとげたすぐれた実績について、すいせんをうけ、下記の所要の資料を本会に期日までに提出する。

4．提出された資料は「青年技術者選考委員会」にかけて選考する。

5．「青年技術者選考委員会」において選考されたものは「第48回青年技術者特集号」（平成13年12月号）に記載するとともに、記念品を贈呈する。

6．提出資料

■すいせん用紙

■略歴

本人の氏名、生年月日、最終学歴、業歴、作品経歴など

■選考資料

資料は、④を含めてA3判用紙**5枚以内にまとめる。**

① 設計の場合――鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、その他設計内容を説明するに十分な資料

② 計画、構造、設備、施工の場合（それぞれの設計計画なども含む）――上に準じた資料

③ 上記以外の分野の場合――そ[illegible]ふさわしい資料

④ 上記①～③のい[illegible]実績において、応募者本人が関与した[illegible]立場等を明らかにし、資料中、本人が[illegible]分、または力量が活かされたと思われる部[illegible]な説明、考え方および将来的展望などについて、**2000字以内に平易簡明にまとめたもの**（必要に応じ、図・表を用いて差し支えない）。ただし応募者・本人の執筆に限る。

このコンセプトは、応募者の考え方を知る上で大変重要と考えているので、十分配慮されたい。

7．**提出期限** 平成13年9月10日（月）

8．**提出先** 日本建築協会「青年技術者選考委員会」

〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31

大阪マーチャンダイズマートビル7階

電話 06-6946-6981 FAX. 06-6946-6984

9．**青年技術者選考委員会**（平成16年度）－予定－

委員長 設楽 貞樹／安井建築設計事務所取締役大阪事務所副所長

委 員 末包 伸吾／神戸大学助教授

貴志 雅樹／貴志雅樹環境企画室

（設計計画部門 未定）

（設計計画部門 未定）

多田 元英／大阪大学大学院助教授

（構造部門 未定）

三浦 満雄／日建設計設備設計主管

（設備部門 未定）

（施工部門 未定）

（施工部門 未定）

応募詳細は検討中

応募詳細は検討中

＊第48回から、すいせん者による「すいせんのことば」を省いています。応募提出規定に沿って、応募資料をご提出下さい。

「建築と社会」誌

特集一覧●1982~2003

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の、機関誌は大正6年9月に「関西建築協会誌」と題して創刊された。大正8年に「日本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。

取り上げてきた特集テーマは下記のとおりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-6946-6981、FAX 06-6946-6984）まで。販売価格は1200円（送料・消費税含）。

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1982 vol.63	●新たな商業空間の展開＊	●省エネルギーと開口部＊	●医療施設―地域医療と設備計画＊	●近畿の地盤と地質＊	●都市景観―まちなみ美観への誘い＊	●大阪市庁舎（第1期）＊	●ホール建築と音＊	●大スパン構造＊	●昭和設計作品集＊	●絵本にみるすまいとまちづくり ●オー・エム・ホテル日航ビル	●第29回青年技術者 ●地方の庁舎建築＊	●風土・空気と人間＊
1983 vol.64	●関西の建築文化を考える	●マイコンの建築への利用	●多様化する運動施設＊	●建築と品質管理	●計画におけるコミュニケーションとプレゼンテーション	●大阪駅とターミナルビル	●維持管理と設備更新	●東海の将来と文化を考える	●オフィス・インテリアの変革	●プレストレスト・鉄筋・コンクリート構造	●第30回青年技術者 ●大阪城国際文化スポーツホール＊	●集合住宅と生活音
1984 vol.65	●21世紀への関西―魅力あるまちづくりを問う	●関西の超高層ビル＊	●ビルのリフレッシュ―内外装補修技術の現状と発展―＊	●建設産業とロボット開発＊	●住環境と法制度	●まちの活性化と商業空間 ●京都駅南口再開発ビル＊	●消防設備のポイント	●みどりとそれをとりまく人々＊	●高齢化社会と生活空間	●床の構工法	●第31回青年技術者 ●ディテールの思想	●光応用システムと建築
1985 vol.66	●大阪湾物語＊	●東海の現在と近未来	●自由様式への道―建築家安井武雄 ●建築物の基礎を考える	●情報化をめぐる建築・都市事情	●ホール―それが生みだす文化―	●建物の表情―最近の外壁材料	●大阪国際見本市新会場	●建築と水の演出 ●神戸研究学園都市	●都市と健康・スポーツ	●接合―人体と建築にみる― ●日建設計作品＊	●村野藤吾の一断章 ●伊勢湾をめぐる東海	●第32回青年技術者
1986 vol.67	●これからの住空間―都市型集合住宅にみる	●屋根―そのデザインと素材	●現代デザイン―ポストモダニズム10年 ●これからの防水工法	●インテリジェントビルの建築・設備計画	●自治体営繕と公共建築	●建築防災と法 ●大阪市庁舎（第2期）	●21世紀の住宅と設備	●開発―その創造的仕掛けの鍵をもとめて― ●ツイン21	●CAD―その応用と展開	●オフィス空間の構成	●第33回青年技術者	●インテリア・イクステンションとリニューアル
1987 vol.68	●入浴物語	●腐食	●創立70周年記念号	●躍動する東海へ	●貯蔵・保管施設 ●大阪府立体育会館	●室内の仕上床	●駅	●行政建築家の可能性	●シティホテルの設備	●宝塚の街づくり＊	●建物と町並みの接点 ●昭和設計作品集	●第34回青年技術者
1988 vol.69	●ホテル物語	●軟弱地盤と基礎 ●文化と伝統―東海からの報告	●設備におけるLCCとリフレッシュ ●東畑建築事務所作品集	●建物の外装リフレッシュ＊	●都心居住	●中国地方の展望とひろしまのまちなみ	●21世紀への照明＊	●制振＊	●超高層住宅を考える	●集合住宅のリフレッシュ＊ ●大阪府営善	●第35回青年技術者 ●800号記念＊	●讀賣テレビ
1989 vol.70	●夢をのせる輸送設備	●リゾート事情 ●竹中工務店創立90周年記念	●色の復権 ●東海の新建築と伝統技術＊	●省力化のための材料・工法	●まちづくりと法	●博覧会とまちづくり	●都市環境創造と設備I	●建築とアート	●構造の省力化 ●鹿島建設大阪支店建築設計部作品集	●都市環境創造と設備II ●ユーザー参加のハウジング	●第36回青年技術者	●最近の博覧会パビリオン
1990 vol.71	●商品化住宅のデザイン＊	●ニュータウン・ルネサンス	●東海の都市景観 ●佐賀市文化会館＊	●スケール感	●プレハブ住宅技術の現在と未来	●国際花と緑の博覧会	●建築家のための設備知識―中規模オフィスビルによるケーススタディー	●高強度化―設計の多様化をめざして―＊	●やわらかな住宅管理・ユーザーの役割	●都市のナイス・プレイス ●兵庫県営緒の歩み	●第37回青年技術者 ●和歌山県の展望と景観＊	●高級感―建物の顔：感性の時代を迎えての外装材
1991 vol.72	●新しい都市空間づくり―I―	●オフィス・プレジャー ●新しい都市空間づくり―II― ●建築の風景	●東海支部復活30周年記念	●大阪東京海上ビルディング	●今、京都 ●建築家のための設備知識―複合商業ビルによるケーススタディー	●建築と土木 ●毎日放送本社ビル ●近畿地方建設局営繕部	●一般号＊	●建築をめぐるトラブルとその解決 ●建設現場のイメージアップ作戦	●空間のアイデンティティ ●きんでん写真集 ●大建設計40周年	●自治体住宅政策への提言 ●大林組創業100年記念	●建築と土木―構造技術の世界― ●第38回青年技術者	●スリムでタフなコンクリート ●21世紀の住まいを考えるシンポジウム
1992 vol.73	●夢物語―人がかわる、まちがかわる―	●こだわりのインテリア ●近畿の郵政建築15年の歩み	●建築とデザイン―東海支部―＊	●建築家のための設備知識―集合高層住宅の設備システム―	●地球環境時代の建築	●街創り、住まい創り―住宅・都市整備公団関西支社10周年―	●木構造を使ってみませんか―集成材による構造―＊	●接着―建築分野への限りなき可能性	●中国地方の町並みと建築家の「語り、夢、作品」＊	●屋台―仮設の魅力に学ぶ― ●ハウジングのメインストリームを探る	●いま建築教育に何が期待されているか	●京のかたちと色
1993 vol.74	●第39回青年技術者 ●東畑建築事務所創立60周年記念作品集	●大阪府営緒	●東海の美術館・博物館	●市民劇場の舞台設備	●環境―限りある自然と建築とのかかわり	●都市のスカイライン	●映画の中のインテリア ●けいはんなプラザ・住友ホール	●建築の再生―構造技術の役割― ●大阪市営緒	●国際的パートナーシップの可能性	●福祉のまちづくり	●都市型住宅再考	●第40回青年技術者 ●環境―人にやさしい空間創造をめざして
1994 vol.75	●コピー文化の新時代 ●広島の街創りアジア競技大会	●九州のインスタレーションと製	●伊勢・神宮式年遷宮と神宮界隈＊	●建築のエネルギーシステム	●明日に向かって―会員作品＊	●いま、医療施設は	●住空間における居どころへの視点	●まちなかの看板 ●竹中工務店の集合住宅	●水と建築 ●日本建築総合試験所	●建築設備のCGシミュレーション ●村野、森建築事務所	●構造美―建築の中の美 ●集合住宅団地リニューアル	●第41回青年技術者 ●関西国際空港
1995 vol.76	●光がつくる風合の世界＊	●音―騒音から操音/創音へ	●飛騨・美濃―まちの活性化と地方文化＊	●トイレから見た都市文化	●トイレ空間	●接合 ●コスモタワー	●ユニバーサルデザインとは	●私の空間作法―会員作品	●新しい「都市・建築」の視点＊	●建築構造と社会の接点 ●日建設計＊	●ライフラインと建築設備＊	●第42回青年技術者 ●滋賀県建築課
1996 vol.77	●阪神大震災から学ぶ＊	●大阪府住宅供給公社創立30周年記念＊	●遠江―その地方振興と文化＊	●立体駐車場設備 ●大建設計	●災害！非常時に生きる法体系 ●OAPタワーズ	●いま、プールがおもしろい	●住まいの未来像	●マルチメディアがつくる世界	●キーコンセプトの新時代	●最新の大規模スポーツ競技施設の設備	●私の空間作法'96 ●九州の元気 ●りんくうの3作品	●第43回青年技術者 ●近畿地建営繕部
1997 vol.78	●建築のロングライフ化をめざして	●鉄ものがたり＊	●東海支部会員作品 ●金沢・金澤―風土・文化とまちなみ・建築＊	●創立80周年記念/建築と私と社会―80人の眼―＊	●木造建築物の伝統技術とその将来	●住む空間の復興―法・制度の運用と新たな展開へ― ●住都公団関西支社	●素材の不思議 ●大阪ドーム	●新エネルギー ●住宅・都市整備公団改革への提言	●クロスワード都市OSAKA＊	●モザイク都市の住むかたち ●昭和設計40周年	●私の空間作法―会員作品―	●第44回青年技術者 ●京都駅ビル
1998 vol.79	●新しいまちづくりの予感 ●東畑建築事務所創立65周年	●Concrete ●九州とわたし、そして建築	●東海支部会員作品 ●信州―諏訪とその周辺―	●街並みの演出―最近の外構材料	●生活環境の安全・安心	●地球環境保全と建築	●心と体を元気にするインテリア	●建築設備―ビルメンテナンスの立場から	●建築への証言'98―21世紀に向けて	●ゆれをとめる―たえる技術からかわす技術へ	●私の空間作法 ●2001年の医療施設	●第45回青年技術者 ●駅とともに歩んだJR西日本の12年
1999 vol.80	●“らしさ”のデザイン ●建築を綾どる小粋なモノの仕掛人	●大阪市都市整備局	●東海支部会員作品'99 ●北信濃―街並み修景と地域文化の再構築	●都市のパブリック	●関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる	●大阪城天守閣平成の大改修	●改正建築基準法―まちづくり・すまいづくりへの展開―	●私の目でみた環境問題	●アーバンインテリア―都市空間としてのインテリア	●木とともに	●私の空間作法	●第46回青年技術者
2000 vol.81	●21世紀のデザインの動向を見る ●安井建築設計事務所創業75周年	●中国支部―しまなみ海道と中国地方の街づくり―	●東海支部会員作品2000 ●越中・富山―地域文化の振興と新たな施設づくりの流れ	●こころを癒す環境デザイン	●測る―測定方法と測定結果が意味するもの―	●スケルトン&インフィル	●改正建築基準法―パートII―	●100年後へのメッセージ ●日建設計創業100周年	●来世紀に引き継ぐ―わざ、もの、こころ―	●時間	●私の空間作法―会員作品― ●21世紀の高齢者の居住環境	●第47回青年技術者
2001 vol.82	●エヌ・ティ・ティファシリティーズ	●21世紀の建築設計教育	●東海支部会員作品 ●岐阜・大垣	●IT社会におけるきずな	●自然素材をめぐる「もの・わざ・ひと」	●成熟社会をささえるまちづくり	●現代の日本の空間・文化を探る	●環境―近未来に向けて今できること― ●大建設計―作品特集1996~2001―	●建築の力 都市の力	●緊張 ●都市基盤整備公団関西支社	●私の空間作法―会員作品―	●第48回青年技術者 ●NHK大阪放送会館・大阪歴史博物館＊
2002 vol.83	●国土交通省近畿地方整備局営繕部＊	●再生・リサイクル	●東海支部会員作品 ●愛知・名古屋	●生活環境の安全・安心―パート2―	●塗装のいろいろ	●都市再生に向けた建築基準法集団規定のあり方	●いま、インテリアデザインは ●漆町リバープレイス	●建築をささえるセンター	●建築とボランティア	●時を超えて～サステナブルエンジニアリングの現在～	●私の空間作法―会員作品―	●第49回青年技術者 ●大阪市中央公会堂
2003 vol.84	●東畑建築事務所創立70周年	●九州の地域づくり・まちづくり	●東海支部会員作品2003 ●愛知・名古屋―この地の文化・芸術と建築・街づくりを考える―	●サスティナビリティ―次世代に引き継ぐ都市・建築・暮らしのデザイン～	●建築と五感	●都市計画法及び建築基準法等の改正	●コンバージョン―インテリアから発信するまちなみ―	●介護と建築・設備	●建築とノスタルジー―建築の主観的価値について～	●力と楽しくつき合う方法	●私の空間作法―会員作品―	●第50回青年技術者＋青年技術者顕彰50年

＊は欠号

建築と社会 07 2004
Architecture and Society
JOURNAL OF THE ARCHITECTURAL ASSOCIATION OF JAPAN

1917年創刊　第85集／通巻988号

今月の表紙

企画／高野直樹
企画と写真／伊藤　彰
表紙デザイン／窓田衣里

●くっきりとした陰影と、伸びやかな直進性のある形態。普段なにげなく見ている風景の中にあるものです。工事現場のアサガオです。建築工事の世界とはおよそなじまない、かわいらしい呼び名がついている防護柵。通行人へのやさしい配慮と、その空へ向かって開く形態が、真夏の道端に色とりどりの花をさかせ、心をなごませてくれる朝顔の花から由来したものでしょう。関西の活性化のためにアサガオをたくさん咲かせたいものです。　（高野直樹）

■特集予告
8月号／銭湯〜心地よさを求めて〜
9月号／「建築家」とは何か〜建築家の職能と価値を考える〜
10月号／巨大地震にそなえて

編集委員会（平成16年度）
■副会長　難波　尚
井上　豊　△肥嶋　好浩
中井　進　向井　洋一
■編集担当理事　安田　拓矢
上原　正行　山本　健二
岡田　聿之　□設備分科会
久我　三郎　△梶井　宏修
佐藤友美子　河井　康人
◎設楽　貞樹　河津　隆之
竹中　統一　近藤　国夫
立成　良三　近藤　正一
広原　盛明　多賀　浩三
堀田　修二　田ノ畑好幸
■特集小委員会　谷野　太志
□計画分科会　桝井　貴廣
★計画系　松浦　肇
飯田　匡　村上幸三郎
伊縫　憲幸　□施工材料分科会
鈴木　克彦　植田　実
田中　直人　竹中　秀文
高橋　和也　太刀川丈爾
辻　武之　（未定）
△紅谷　昇平　平田　茂良
松田奈緒子　平野　剛
三宅　次郎　△吉田　正友
森　康郎　□法令分科会
吉村　英祐　坂中　信隆
★建築計画系　鶴田　和幸
荒木　宏之　野村　彰
江副　敏史　溝上　省二
奥村　朋孝　△山口　一郎
菅野　忠司　山根　正利
木多　彩子　■作品作風小委員会
楠　敦士　赤木　隆
小林　優子　石塚なぎさ
△桜井　則雄　居内　章夫
笹村　欽也　井上　雅祐
静　茂夫　池上　明
所　千夏　川上比奈子
野田　隆史　倉渕奈千子
★インテリア・住宅系　澤田　純一
阿部　泰浩　寺岡　宏治
加藤　力　鞆野　淳司
黒柳　亮　○中村　文紀
高野　直樹　林　孝司
△田中　浩介　前川　治彦
戸井賢一郎　増田　敬彦
西田　和子　山田　俊紀
ペリー史子　■広告企画小委員会
本山　仁　荒本　俊明
□構造分科会　石塚　俊明
稲田　竜也　大竹　賢次
大氏　正嗣　斉藤　治久
大住　和正　竹内　健介
木下　隆嗣　前田　衛
白髪　誠一　横田　和生
田渕　勝道　○渡邊　浩文
永原　吉浩

◎委員長　○副委員長　△幹事

印　刷　2004年6月25日
発　行　2004年7月1日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
大阪市中央区大手前1-7-31
電　話　06-6946-6981
振替口座　00910-9-39975
印刷所　青葉印刷株式会社
(株)NPCコーポレーション
定　価　1200円〔税込〕

CONTENTS

特集●　Product Design＋1
〜プロダクトのインテリアデザインへの展開〜

［総論］　プロダクトデザインの変遷〜デザインと空間〜●池上俊郎　14
インテリアとプロダクトデザイン●伊東史子　17

［各論］　液晶テレビAQUOSとインテリア〜心豊かな暮らしへのまなざし〜●喜多俊之　20
これからの冷蔵庫デザイン●有村敬三　24
鉄道車両の空間デザイン●木村一男　26

会告　総会議決お知らせ.臨時理事会議決のお知らせ.事務所移転のお知らせ.平成15年度事業報告書.平成15年度決算報告書.平成16年度日本建築協会役員会務分掌.日本建築協会評議員.日本建築協会支部長.日本建築協会委員.若き創造者たちへ—第51回青年技術者特集号へのおさそい　1

作品作風　NSDビル　10

gallery　空間の装飾（谷川　勲）●鞆野淳司　12

法令コーナー　「大阪・工事監理の星」支援システム●山本　強　28

構造の頁　ガラスの最前線—サブストラクチャーとしてのガラスの可能性●高橋一教　29

information　大阪芸術大学博物館所蔵品展.「チャイナ・ドリーム」展.“建築材料から「環境」を考える”.第24回大阪まちなみ賞募集.滋賀県立大学で教員公募.ecobuild賞応募作品募集.「防犯建物部品の普及展」.ソールフォード市が都市計画のアイデアを募集　31

日本建築協会賞　第6回「日本建築協会賞」入賞発表　32



作品
作風

設計・監理■
東畑建築事務所

施工■
竹中・大林建築共同企業体

NSDビル

コンピューターのソフト開発および更新を主たる業務とするクライアントの自社ビルである。
永年賃貸ビルで過ごしたクライアントは、いつか「我が家」をと、念願し、その姿に思いを膨らませてきた。昼は周りの建物を映し、夜は反転し中が丸見えというガラス張りの建物はいけない。時を経て、その地に溶け込む陰影のある外観。夏の日の深い緑陰を創り出す街路樹。建物だけに止まらない都市のあるべき景観に配慮したクライアントの言葉である。
光の階調や陰影に気を遣い、求められる「我が家」を目指した。計画ではコアを東側に寄せ、基準階で19m×27mの無柱の執務空間を確保し、床吹出空調、エアフローウインドウ（西面）を採用している。５～13階の北面と西面に、日射や対面のビルの反射光、ガラスへの周辺の映り込みを遮るバルコニーを設けた。内部は執務室のほか事業所内保育所や24時間稼動のデータセンター、ダイニングルームなどで構成されている。（中村文紀／東畑建築事務所）



所 在 地 ――大阪市中央区高麗橋3-3-7
敷地面積 ―― 1,690.92㎡
建築面積 ―― 878.94㎡
延床面積 ――11,138.34㎡
構造規模 ――SRC、CFT、B1F、14F、P1
工　　期 ――2002年10月～2004年２月
最 寄 駅 ――地下鉄御堂筋線・京阪電鉄「淀屋橋」駅
撮　　影 ――藤　義則／エスエス大阪

左頁：北西コーナー部見上げ（石彫は、伊藤聖悦「梟」）
右頁：１階ロビー（荻原守衛「女」）／13階コート／外観





gallery

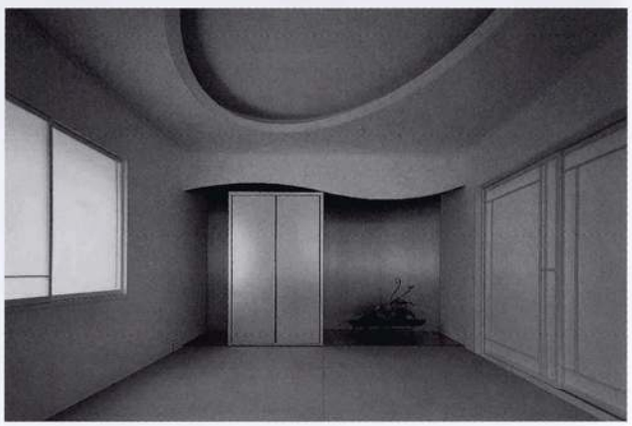
空間の装飾

設計
谷川　勲

敷地は、芦屋の閑静な住宅街にあり、六甲山脈、神戸港のパノラマの鳥瞰が望めます。平面計画は、眺望の一番よい2階に生活スペースを配置し、「眺望」を家族皆が日々の生活の中で自然に満喫できるよう計画しました。西面に大きな開口を開けるために、西日を配慮して大屋根をかけています。大屋根の深い出によってできる影が建物を隠し、街の景観に対しての建物の威圧感を抑制しています。
エントランスには、曲面とフラット面のフロストガラスを用いて、空間の機能を「玄関」「廊下」「階段」と独立させながら、ガラスの透明性・光の透過性によって空間の一体感の創出も意識しました。
和室の床板と仏壇入、押入の壁にはガラスを用いています。茶室空間の中で外部の光に反応し、光沢を放っていた「竹」のアイデンティティーを現代の素材での表現を試みています。







谷川　勲
1949　大阪府生まれ
1973　日本大学理工学部卒業
1977　ドイツ・ハノーファー工科大学留学
1979　Graaf & Schweger 建築事務所
1980　出江寛建築事務所（～'87）
1988　谷川勲建築研究所設立

企画編集　鞆野　淳司(作品作風小委員会)

特集 Product Design＋1

～プロダクトのインテリアデザインへの展開～



プロダクトデザインの世界がどんどん面白くなってきています。
住宅の居間の中に、黒く目立つ大きなテレビをどこに配置したらいいのだろう、とインテリアデザイナーが頭を悩ませた時代は過去のものとなりつつあります。近年のプロダクトの宣伝には「空間」ということばが良く聞かれるようになりました。プロダクトのデザインはその自己完結性から抜け出し、急速に外の空間へ発信するデザインに変貌してきたように思います。プロダクトデザイナーたちが、その作品が使われるシーンや空間を、もっと明確に意識してデザインしているものが多く見られるようになりました。そしてそれは利用者に対して、物自身のデザインのみならず、その物を取り巻く空間までをもアピールする力を持つようになってきました。建築家やインテリアデザイナーも、単に美しく自己完結されたデザインのプロダクトをチョイスして配置する、というのではなく、それらの新しいプロダクトデザインが発信している、空間への「シグナル」にもっと耳を傾けるべきではないでしょうか。その中で、プロダクトとそれを取り巻く建築空間の新しい関係性を見出すことができるのではないかと思います。
本特集ではそれらの新しいプロダクトデザインの流れを、建築空間との関係性のなかで捉えてみたいと考えています。

企画●インテリア・住宅分科会

【総論】
プロダクトデザインの変遷～デザインと空間～／池上俊郎
インテリアとプロダクトデザイン／伊東史子
【各論】
液晶テレビAQUOSとインテリア～心豊かな暮らしへのまなざし～／喜多俊之
これからの冷蔵庫デザイン／有村敬三
鉄道車両の空間デザイン／木村一男



プロダクトデザインの変遷
～デザインと空間～

池上俊郎

2つのプロダクトデザイン
－生活領域デザイン　社会領域デザイン－

テーマはプロダクトデザインである。イメージされているものは、生活領域デザインであり、同時に視覚デザインも含まれている。ある意味で、プロダクトデザインを中心とする“デザイン”と空間の関係ととらえたほうがわかりやすいように思う。建築には、住宅のような個人的生活領域と公共空間のように社会領域がある。プロダクトデザインにも生活領域と社会領域がある。

ここでは、双方の領域からプロダクトデザイン＝デザインの可能性を探りたい。世界は、多義的価値の同時存在である。

3つのデザイン

デザインは、“構想・設計・美学”の3側面を有している。戦略やグランドデザインを担う構想、技術や使用素材を決定する設計、全体を形態化し空間化し統合する美学。デザインにかかわる多くの人たちはこれらのいずれかの立場から、“デザイン”している。

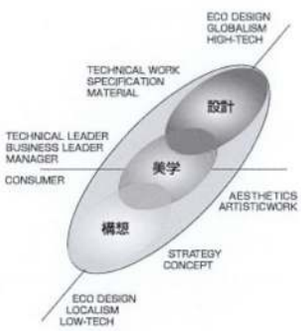
デザインは基本的には、3領域から始まっている。

1．出発点を2次元領域平面に置くコミュニケーションデザイン
2．同じく3次元領域立体のプロダクトデザイン
3．4次元領域空間の環境デザイン＝エンバイロメンタルデザイン

複雑に可変進行する社会では、領域は相互に重複し、多方向の時代の要請を形態・空間として“デザイン行為”に統合する。

機能を有する立体

プロダクトデザインとは、設置場所の可変性を持つ立体であり、機能を持つ商品である。私の記憶するシーンにある機能を有する立体イメージを述べる。“構想－設計―美学”“生活領域―社会領域”“形態―色彩―素材―生命―空間”の関係をさぐる。



1．2004年春アメリカ　セントラルパークの鳥

今年4月にNEWYORKを訪れた。都市のヒートアイランド克服におけるクールアイランドとしてのセントラルパークの調査を行った。その折、池を訪れる鳥の姿を追っていて見たのが魚を捕らえる瞬間であった。白い鳥が朱色の魚を捕らえた。その瞬間、2つの生命体の関係は、色彩的対比を背景に、スカイスクレーパーに囲まれた人工的社会マンハッタンと数億年前の自然の姿を残すセントラルパークの光景のすべてを視覚化し物質化した。クールアイランド形成の



出発点が食物連鎖に見られる多様な生物の生息環境形成、であるという基本点をも示した。

形態デザインとしてのプロダクトデザインの役割とは、最終的には機能を有しながら、暗黙知として一目瞭然その役割を“形態―色彩―素材―生命―空間”の関係性において伝えていくことである。

2．イタリアンレッド・イタリアングリーン



イタリアの古い港町ジェノバは、古典的な建築に満たされている。イタリアンレッドやグリーンの最新デザインの車は石造りの街区の印象に対して形態的現在性、素材、性能により、現在という時代性を街と生活空間に与えている。ここでも色彩と素材の対比効果は大きく、補色にあるレッドとグリーンが形態を浮き上がらせ周辺の空間を覚醒し鼓舞している。色彩の異なる日本製の大型バイクですら、マシーンの姿を浮かび上がらせ、現在と過去の伝統対比を行っている。新たな技術に基づく新たな存在形式の現実への投入。

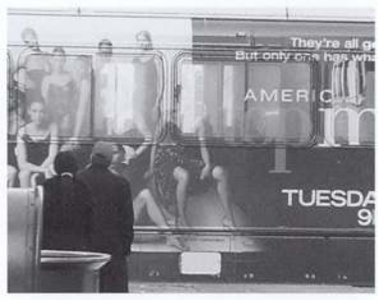
ヨーロッパの都市が過去からの伝統的形態言語を持続しながら社会の進化をはたしている理由でもある。

3．1本の樹・スペインの街・アメリカ　アスペン

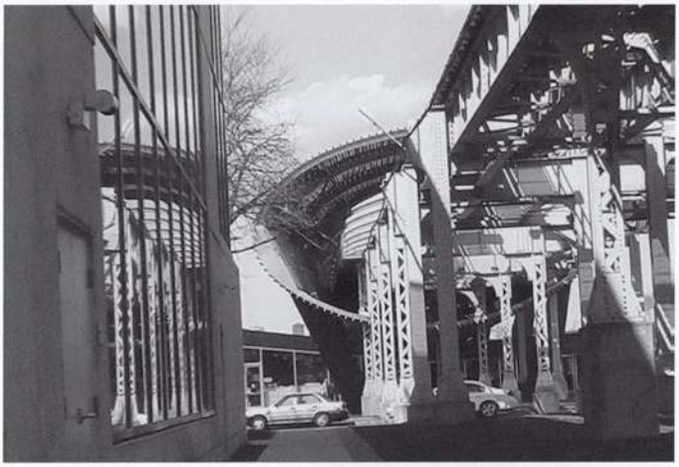


初めて1973年秋にヨーロッパを旅した。その折スペインの街を歩いて、街中の住居群にある中庭に入り込んだ。床も壁も同質のテラコッタで構成された中庭に1本の樹があった。その後、中国の四合院の中庭でも目にした。1本の樹が空間を変化させ、ヒューマンスケールを確保し、求心性を与えている。アメリカ・スキーリゾートで名高いアスペンで目にしたのは、街角の住宅の数倍も大きな樹であった。環境のスケールを体現する生命は、象徴性を持ち地域空間の基盤としての自然を表現していた。

4．ラッピングバス



ニューヨークで見たバスは、車体がラッピングされ



メッセージを発していた。視覚情報が大きな面積を占める移動体は、広告を通じて都市を劇場化している。



5．都市を内包する空間

シカゴの鉄道は高架を走る。ガードレールのない路線がダウンタウンから南に走る。イリノイ工科大学（IIT）のキャンパスに差し掛かるとチューブ状の空間に入る。レムコールハースによるマコーミック トリビューン キャンパス センターの一部である。建築は鉄道の高架を取り込み、内部は平面空間を機能的に分節し、断面的にも抑揚を持ち連続している。扉のない空間は、かつてミース ファン デル ローエが同じIITのクラウンホールで試みた壁面のない均質空間の拡大解釈であった。掘り込まれた運河のようなインターネットスペース。ため池のような食堂。ハニカムのプラスチックで出来た白いテーブルは湾岸の埠頭のようである。機能の多元方程式としての現代的空間である。定型性を失った現在の都市空間が内包されている。都市空間すら土地の呪縛を脱し浮遊し、いわばプロダクトデザイン化することを示している。

6．デザイナーメイド説

フイリップスタルクは言う。“私は、メイドである。主人が帰ると、スタルクのデザインしたものでいつもきれいな部屋を用意している”。プロダクトデザイナーはプロダクトデザインを通じて物質空間を変化させ、精神世界の拡張を生み出す。メイドであり、手品師でもある。

焼酎の“いいちこ”は20年も前から世界中の見知らぬ土地に“下町のナポレオン”と書かれた“瓶”を旅させ、異風景との遭遇により文化を形成してきた。多くの人が首都圏の山手線の駅で目にした。宣伝というよりは、“いいちこ”あるいは“焼酎”という知的なコミュニケーションライフスタイルを創ってきた。アートディレクター河北英也の仕事である。アートディレクションとしてデザインの総合的訴求力を通じて進化させ、大分県の地域密着型商品に、文化形成の国際的普遍性を与えた。関連する空間までも変貌した。

7．STRUCTURED　PLANNING

米国シカゴのイリノイ工科大学デザイン研究所元所長CHARLES L. OWEN名誉教授は、地球環境問題の資源やエネルギー分野での解決をさまざまなデザインプロセスを通して提案してきた。例えば、宇宙空間における太陽熱発電施設計画や、マングローブ林再生のための浮き構造システム、“アクアテクチャー”と名付けられた水上構築物の多様な展開、ハイテク化された静止浮遊体としての空中基地である飛行船etc。未体験のSF的世界を数字で裏付け、デザインとして形態化し、提言してきた。いずれも、地球の自然な生理現象としての環境バランスの獲得を目的としたプロジェクトである。アメリカ人特有のフロンティア意識が背景にあり、技術的知性の発展に対する楽観主義が背景にある。

氏は“STRUCTURED　PLANNING”に基づいて社会に提案する。プロダクトデザインを頂点とする氏の考えにある人工界と自然界双方に対するデザイン決定プロセスは、社会問題解決のプログラムと軌を一にしており、普遍性を持っている。これらをデザインとして支えるクラフトマンシップやディテール及びコンセプトに対する配慮も見逃せない視点である。デザインは人工界と自然界におけるさまざまな分野の未知の諸問題を解き、“実体”として社会的に統合する。

デザインに内在する
科学的パラダイム・美学的パラダイム

上述のように、“モノ＝立体”のデザインであるプロダクトデザインと空間＝環境の関係は、楽しく生き生きとした多義的世界である。

地球上のあらゆる事象は、自然界と人工界に属する。人工界は、操作された音声と形態をはじめとする五感の世界である。形式知を科学に、暗黙知を美学に委ねている。人工界は、常時総合的に存在している。しかし、物の見方の主たる視点の変化が、美学的パラダイムか科学的パラダイムのどちらか一方のみに視点を与えている。デザインは、結果としての外観上は美学的パラダイムに属しているが、出発点は科学的パラダイムにある。課題に対して、後者である技術操作と、空間・形態操作のプロセスを経て、最終的な解決である前者の美学的統合として存在する。

根底から変革するデザインの時代

コンピューターによる情報社会は、形式知と暗黙知の領域の垣根を取り外し、ユビキタス社会に入っている。技術と時代の落とし子であるデザインは、現在の急速な変化の時代にあって、“変化の体現者”としての役割を演じている。

デザイン領域は　技術の進化・人工知能・新たな素材・形成手法といった性能の向上を背景に、自由な形状・自由な色彩・多様な機能を得、対象を人間の行動に近づけてきた。日本の戦後のプロダク

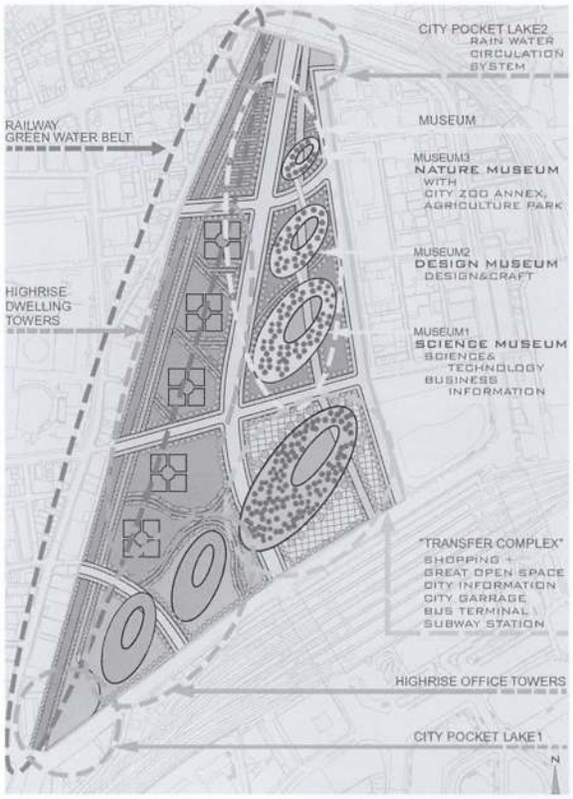
トデザインを“GOOD DESIGN”制度として支えてきたG—MARKの選定対象・基準の変遷がそのことを語っている。商品を中心とする展開から、建築施設領域、視覚デザイン領域、マルチ領域デザインへの変化、エコデザイン・ユニバーサルデザイン・インタラクティブデザインへの配慮が人工界と自然界のあり方を探ってきた。

とりわけ私の興味を引くのは、エコデザインである。地球環境問題の観点から、さまざまな商品が形成される“素材・製造・輸送・使用・再使用・廃棄”の全工程を評価し環境負荷の軽減を探る“LCA＝ライフサイクルアセスメント”という手法がある。“環境を配慮するデザイン”を表す“エコデザイン”の考え方の基本である。温暖化ガスであるCO_2の排出量を減らす、あるいは環境ホルモンを減少させる、化石燃料依存量を減らす。そして環境負荷を現在の4分の1＝ファクター4、10分の1＝ファクター10と減少しようとしている。

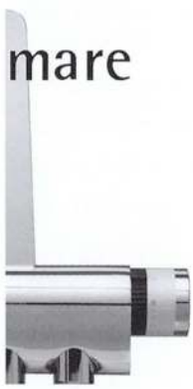
商品形成の全工程を再度洗い直して設計していくその手法は、“創り方”を根底から変え、“機能・形態”を変化させる原点でもある。洗剤を使わない洗濯機、電子制御機能を高めたハイブリッドの乗用車、リサイクル可能なコピー機。排気ガスの30%を酸素に替える車、発電機能を替え形状と駆動の関係を変える燃料電池、植物を原料とする生分解素材群等。環境技術は、広く宇宙航空技術や人工知能技術、バイオテクノロジー、ナノテクノロジー等と相互に関連し展開している。太陽の活動の範囲内で起きる生命体を中心とする視点と機能構成の検証は、情報技術・企業の社会的責任の進化とともにプロダクトデザイン対象を替え、空間デザインをも変えていく。太陽系は英語でソーラーシステムであり、人工界と自然界の統合の原点である。

計画から編集へ
—プロダクトデザインと空間の関係は始まったばかり—

以上のように、技術と解決手法の進化を背景に、新領域複合型にプロダクトデザインは変貌をさらに進めていく。空間も平行して自由度を増す。一方で地球環境問題というわれわれの原罪の克服が限られた時間で解決しなければならない大きな課題としてある。デザインの対象は個々に存在するのではなく、同時に社会事象として存在している。私は、“設計・計画”をさまざまな生活・社会事象の同時解決として“編集”と位置づけるべきだと考えている。編集する＝EDIT。都市編集、建築編集。計画は未来を描くことである。そして実施する。しかし計画はすべての未来を読み込み体現してはいなかった。設計図書に変転する世界を書くことはできない。現在のように社会が走馬燈のように移ろう時代にあって、5年先を読みとることはむつかしい。変化を前提に、時代に即して“編集する”ことが望まれている。



trancefer show case



mare


東町江戸町ビル

私は独立した頃に、“解剖台上の私性群”と名付けた設計の取り組みをした。ロートレアモンの“解剖台上のミシン台とこうもり傘の出会いのように美しい”という言葉に魅了されていた。“世界が解剖台とすれば、もっと多くの出会いがあるだろう。モノも、空間も、グラフィックデザインも表現に差異はない”。もっと多くの個性を持つ個＝individualesを社会に提供し、棲息空間を進化させたい。この思いと行動は今も変わっていない。空間を編集する基点にプロダクトデザインがある。その豊かな個性が空間を鼓舞し“QUALITY of LIFE”を強化する。プロダクトデザインと空間の関係は始まったばかりである。社会総体を対象に建築、空間、プロダクトデザイン等のデザイン全領域において、デザイナーが自由に行き来しコラボレートし、精神的に豊かな社会を形成すべき時代が来ている。

最後に、創り手として都市からプロダクトデザイン領域までデザインした“私性群”の一部を、参考資料として添付する。

（いけがみ　としろう　建築家・京都市立芸術大学教授）

総論 2

インテリアとプロダクトデザイン

伊東史子

「日本は遠くから見るものは設計できないが、デリケートな内部空間の仕上げに関して、天才的な才能を発揮する」。けなしているのか、褒めているか分からない発言だが、論客でもあるイタリアの建築家、デザイナー、アンドレア　ブランジは、東京での大規模商業地区開発を見て、こう言った。「それは物理的に遠くなのか、歴史的に遠くなのか」とたたみかけると、「日本人の歴史感覚は謎である」という答えが返ってきた。

私は長年、海外のデザイナー、建築家とのコラボレーション、デザインマネジメントに携わり、空間、オブジェクト、建築、都市に関する認識のすれ違いにしばしば立ち合う。もちろん、何が望ましく、何がよろしくない、ということはないが、それぞれの優先順位がビジュアライズされ、そのズレはなかなか示唆に富む。

空間を感じることの難しさ

安易な一般化は避けたいが、日本の近視眼的なディテール志向は、完成度の高いプロダクト、工業製品を生み、鑑識眼と欲望を育てたかわり、「空間」という領域に対しての意識や感覚は発達しないまま現在まで来てしまったようだ。都市、建築、空間に関しては何をどう見て、どう感じたらいいのかが分からない。よって判断力もないし、執着も少ない。すると当然のことながら、空間はよくならない。ブランジ氏をもって、「街は混沌としているが、各ディテールは完璧だ」と言わせる状況が生み出されるのである。彼らには「掌の美学」と映るらしい。

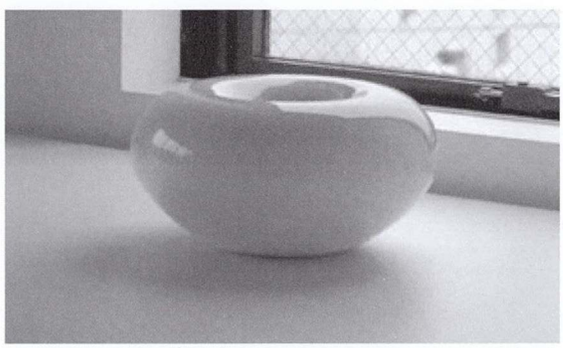
ある気鋭の建築家から、極限のローコスト住宅を依頼してきた施主が、最高級のジャガーとベンツを持っていた、とほろ苦い笑い話を聞かされたことがある。インテリアブームとは、空間に対する認識が洗練されてきたのではなく、消費動向がファッションや自動車から家具や部屋に置く小物へ移った現象のようだ。今はインテリア家電、デザイン家電などという言葉がもてはやされているが、オブジェクトのデザインによって、たちまち空間がよくなるというのは美しき誤解である。

オブジェクトが人間の行動、活動、行為を美しくして、空間ははじめて生きる。空間を想定したプロダクトデザインとは、自己完結してしまった「美しさ」ではなく、他の何十、何百となる空間の構成エレメントの脈絡をつけられるものであるとも言えないだろうか。

また、盆栽、箱庭文化を持つ私たちは、ついすべてを小さく、軽くするのに執着してしまうようだ。ただ存在感を希薄にすることよりも、どう見せるか、どう隠すが問われないかぎり、空間の緩急がつかず、メリハリは出てこない。コンピュータやテレビが薄くなって、どんなに部屋がきれいになるかと思いきや、あっと言う間に他のもので散らかってしまうのである。これは「机の上が片付かないので、机を倍の広さにしたら、散らかりも倍になった」という西沢立衛氏の説と同じロジックだ。あるいは「図」が洗練されて主張しなくなる反面、「地」が目立ってしまうとも言えるだろうか。残念ながら、空間の有効利用と物理的な広さのあいだにあるフォーミュラ（公式）は思い通りにはいかないものだ。

トランジショナル　オブジェクト

インテリアとプロダクトという今回のテーマを編集部から聞いたとき、実のところ、私は子どものころに流行った「家具調テレビ」を思い出してしまった。テレビがまだ三種の神器であった時代には、存在感があって、これ見よがしなものが好まれたに違いない。今、私がこのような「自己満足」から欲しいものを挙げるならば、plusminuszeroの加湿器である。アトピー体質で湿気厳禁でも、欲望プライオリティが高いのである。必然性は二の次だ。



plusminuszeroの加湿器

インテリアを構成するオブジェクトには、このような心理的な役割がある。ここでは「これさえあれば、部屋全体にステキな空気が満たされ、すべてよくなる」という幻想が支配する。つまり必要か、便利か、という次元では測れない「存在を支える道具」が求められるのだ。トランジショナル　オブジェクト＝自己存在を投影したモノという考え方だ。かつてそれはアートや嗜好品が担うと考えられてきたが、現代において、その役割を果たすのはデザインである。分かりやすい例は背の高い「社長の椅子」であり、アレッシ社のデザインガジェットだ。

インテリアという文脈の中で、デザインのクオリティをどう判断するのか。これは複雑な課題なので、多くの方の意見を伺ってみたいが、ひとつ示唆的だと思われるのは、エリック　サティが「部屋の中のいつもある家具のような音楽を作りたい」と言ったことである。plusminuszero深澤直人氏のデザインは盲点の中に消えてしまいそうなところにいるようで、強力に空間を引き立てているではな

いか。デザイナーの側が自分の「印」に執着しなくてすむほど自信があるとき、解放され、他との調和を恐れないオブジェクトが可能になるのではないか。

建築家と家具、プロダクト

空間とプロダクトは様々なアプローチから語ることができるだろうが、私はなじみのあるイタリアのデザイン状況からインテリアとプロダクトデザインの成り立ちを考えてみたい。

この10年くらい前まで、イタリアのデザイナーはほとんどが建築専攻で、大学にはデザイン科なるものがなかった。また建築といってもアメリカや日本のように工学的なアプローチばかりではなく、インタレクチュアル層の素養でもあり、社会を論じるとき、都市と建築は、夢とロマンをもって大いに語られるべきという文化的風土がある。また、イタリアは歴史的建造物が現在も使われ、内部空間だけを再生させてオフィス、住居にすることが何百年も行われてきている。よって、建築家は否応なしに歴史と対峙し、現代の空間を創造することを要求される。

イタリアでは建築家が建物から、インテリア、プロダクト、家具までを幅広く手掛けることは珍しいことではない。建築家によるデザインの大きな特徴は、空間からモノを考えるということだろう。具体的に言うと、対象の機能や美しさのみからではなく、そのオブジェクトがあることにより、人間のふるまい、行為がどう変化し、はたしてそれが生活の向上に貢献するものなのか、というアプローチである。ニューヨークの近代美術館で開かれた初の総合的イタリアデザインの展覧会Italian Domestic Landscapeで、このイタリアモダンデザインの「宣言」がなされた。これは、企業や経済システムから独立しているイタリアのデザイナーの社会的立場を如実に現すものだった。彼らにとって、デザインとは職業であるばかりでなく、思想的表現をする場でもあるのだ。

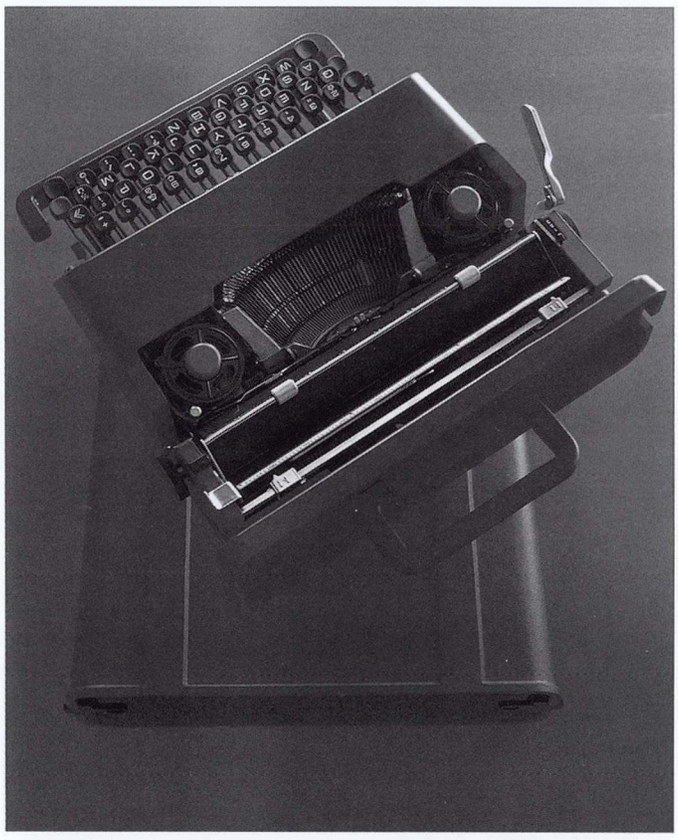
ただし、Domestic Landscape 内なるランドスケープと言うとき、「空間」というのは生活領域ということで、インテリアの仕上がり感と混同しないほうがいいかもしれない。日本で「生活」というと、所帯染みた印象が嫌われるが、イタリア語ではvitaという言葉は「生命、生活、活力」という意味を持ち、多次元的でダイナミックなものを指す。「生きられた、住まわれた」空間は、生活実感があるものとして賞賛されこそすれ、厭われることはない。

なぜ赤いタイプライターだったのか

例えば巨匠エットレ　ソットサスが1969年にデザインし、オリベッティ社から出た赤いポータブルタイプライター「ヴァレンタイン」には、「どこにでも持ち歩けるプラスティックバケツに入った、誰でも買える安価な道具」が意図されていた。当時も今も、この伝説のオブジェクトに魅力があるのは、自己完結する美しさだけではなく、新しい人間の行為がデザインされて、空間を紡ぎ出すことができるパワーによるのだろう。ちなみにこの製品はMoMAに永久収蔵されているが、工業製品が美術館にコレクションされる最初の例でもあった。

また、同時にイタリアは新しい建築が土の上から新たに建てられることが非常に少ないので、建築家たちは自らの研究、思想を家具やプロダクトに投影し、心血を注いできたという背景もある。ソットサスは建築を建てるように、家具を考え、プロダクトを設計してきた、と言う。彼の作るものすべてには「この壁の向こうでどんな感情があり、このドアを過ぎると何が待っているのか」という空間への思いが結晶している。だから自分のデザインは「住まわれる－使われる」べきであるとも。

ソットサスのインテリアには建築のボキャブラリーが多用され、またオブジェクトとの脈絡も保たれている。最初、インパクトのある色と形に目を奪われるが、やがて、そこの居る人の動線が見えてくるようになり、その細やかな配慮におどろかされる。こうやって、



オリベッティ社のヴァレンタイン・ポータブル・タイプライター

「空間」に対する認識と要求水準が高まり、インテリアの質が上がっていく。

また彼は言う。「美しいグラスがあれば、もうボトルから水を飲むことはないだろう？　デザインとはそういうことだ」。

空間のプロダクト化

インテリアの構成要素：床、壁、天井を建材ではなく、三次元的に商品化しようという試みに、無印のインフィルが位置づけられるだろう。つまり、空間の質と行為そのものをパッケージしようという挑戦だ。

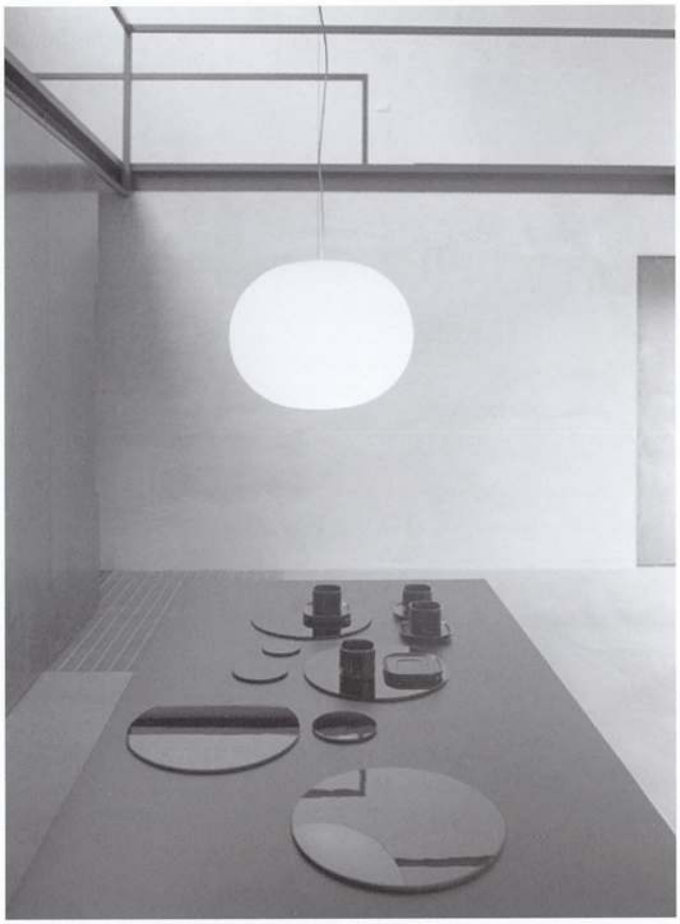
例えば吉岡徳仁氏の提案は、使える空間はひとつでも、開ける扉によって機能が変わり、空間の質が変わるという考え方だ。キッチンのドアを開けるときは、空間はダイニングルームになり、書棚の扉を開けると、そこは書斎、あるいは仕事場になるのだ。彼はドアを壁にすることにより、空間を整理して、片付けてしまう。キッチンの痕跡は書斎にはない。空間を使いこなすテクノロジーが研ぎすまされていくようだ。

無印インフィルにより、空間を「外側」から見る視点が開発されているのではないか。二次元＝ビジュアルの組み合わせであったインテリアの世界に、次の認識方法を持ち込んでいるように感じられる。建築家、インテリアデザイナーはにわかには賛同しがたいだろうが、新しい分野が育っているのではないか。

言うまでもないが、これは東京のように土地、空間が高価で縛りが厳しい風土で発展する技術だ。だが、土地は十分あるはずの地方ディベロッパーの営業担当が「9坪ハウスをやってみたい」という本末転倒に、この方向の可能性を感じる。これは今後の日本の空間技術のベースになるのだろう。自らの「生活編集」というでもいうべき能力をそなえた新しい人種が登場するだろう。

企業経営とデザイン

イタリアデザインというと、機能よりもスタイリング重視といったことが言われてきた。海外と日本を長年往き来する女性が「イタリアはデザインも男も美しいだけで、使えない」とこぼしていたほどだ。が、人は機能のみに生きるにあらず。人類は美しいものなしには生きていけない、という事実に正面から取り組むのがイタリアの起業家たちなのである。また多少時代錯誤の感もあるが、ドルチェヴィータ：仕事よりも甘い生活、という生活哲学も見逃せない。ここにも、やはり「生活空間」という領域に対する意識の違いが見られよう。つまり、製品を売りやすくするためのデザインではなく、デザインにより生活クオリティを変え、そこでビジネスを成立させることが経営の主眼にある。



Flos社 Jasper Morrisonのglow-ball　写真提供／ヤマギワ㈱

これまで、イタリアの企業は社名がファミリーネームという会社が非常に多く、よって多くが中小のファミリービジネスであることも、ヒューマン＝人間的スケールを維持しながら、人々の生活に貢献することに役立ってきた。手工業的技術、味わいを残した工場、工房が多くあり、マス市場へのマーケティング理論とは離れたところで、様々な文化圏のデザイナーが直接、製造にかかわることができたことも意義深い。このような手触り感のあるデザインが、生活空間を押し上げてきたのである。ただ、ヨーロッパ統合以降、イタリア経済へも変革の嵐が到来し、かつてのようなイタリアのよさは目減りしているのも事実だ。

こういった状況を鑑みると、現在、私たちが展開できる「空間技術」はオリジナルなものを生み出す時期にきたと言えるのだろう。イタリアをはじめ、海外から学ぶことは多々あるが、日本の制約の多い中で作り上げられる「プロダクト」が魅力を持つものに育つのは期待してよさそうだ。

昔、ある有名家具メーカーの先代の社長が、ショールームの椅子を自らせっせと拭いていた姿を思い出す。デザイナーやスタッフは呆然としていた。実のところ、どんな空間でも、洗練させ、磨く方法は掃除なのだ。大げさなことを書いてきたのに、まったくマヌケな結論だけれども。

（いとう　ふみこ　プロジェクトコーディネーター）

液晶テレビAQUOSとインテリア
～心豊かな暮らしへのまなざし～

喜多俊之

インテリアとプロダクトの関係を考えるとき、これまで建築側では何も置かれていない空間をインテリアと捉えがちな一面がある一方で、プロダクト側では自己完結的なデザインが主流だったように思われる。しかし最近の傾向として、プロダクトが建築空間あるいはインテリアに対して問いかけている、あるいはプロダクトにふさわしい空間を強く訴求していると感じられるような広告やCMを見かけるようになってきた。

そこで、環境及びインダストリアルデザイナーとして広く活躍され、歴代の液晶テレビ「AQUOS」のデザインをされている喜多俊之さんに、どういう視点でプロダクトのデザインを心がけているか、またインテリアとプロダクトの関係をデザイナーの視点からどのように捉えているか、そして具体的に「AQUOS」のデザインについて、大阪市北区天満にある㈱IDKデザイン研究所を本誌編集委員ふたりが訪問し、お話をお聞きした。

インテリアとプロダクトの関係

――まず、インテリアとプロダクトの関係をどのようにお考えでしょうか。

喜多　私はインテリアとプロダクトとは同じものだと考えています。照明器具や家具であったり、極端に捉えれば一枚一枚の食器に至るまでがプロダクトですが、インテリアとは、そういったプロダクトの寄せ集めであり、逆にプロダクトの寄せ集めがインテリアである…と。日本は戦後しばらく、それぞれがバラバラに扱われることが多かったように思いますが、最近はたとえば、住まいの中の空間としてリビングなのか、寝室なのか、キッチンなのかというように空間単位で語られるようになってきました。

――建築家の人は、何もない空間、生活感のない空間をインテリアと捉えがちなことが多いと思います。

喜多　主人公は、そこに住む人です。

日本は第二次世界大戦後、住まいについて考えることは後回しになってしまいました。個々のモノや住宅そのものは、今まで語られてきていますが、そこに住んでどういう暮らしをするかについては、置き去りにされてきたのではないでしょうか。けれど最近になって、心豊かに文化的に暮らすことがあらためて脚光を浴びてきているようです。一つずつのモノや住宅が中心なのではなく、本来は人が中心であり、その周りにモノが置かれて、インテリアが出来上がります。もともとの空間はシンプルであっても、プロダクトによってその空間は一変するのです。そうやって空間を演出するという行為については、もっと活気を帯びていかなければいけないと考えています。

ある日私は、たくさんのお客様と会合しているとき、その中の一人から質問を受けました。「家の中をきれいにするためにはどのようにしたら良いですか？　またどんな物を置けばいいですか？」。私はこう答えました。「家に友人を招かれたらどうですか？」。これには、会場から拍手喝采を受けました。

人が家に来ることで空間が変わってくるのです。家は、家族が暮らす空間というだけではなく、人と人とがコミュニケーションして過ごす場所なのです。特にリビングはそうです。その空間を、どういうプロダクトで演出するか。椅子や照明・カーテンなどの素材や色をどんなものにするか。それらによって空間を演出することがインテリアということなのです。

このことが今まで後回しになっているせいで、ついつい家の広さを考えずにモノを入れすぎて、身動きがとれなくなるようなことがしばしば見受けられるわけです。

もともと日本では文化的に家の空間にはモノは少なく、ひとつの空間を用いて昼はリビング、夜は寝室、来客時は客間というように変幻自在でした。これは大変合理的で、素晴らしかったと思います。その後、西洋文化を受け入れてきた過程で、家自体が昔のままであるのに、部屋の大きさに関係なく大きなステレオやピアノ、応接セット、勉強机、婚礼セットなどを次々に置いてしまい、その空間に見合ったプロダクトを調整できなかったから、家が納戸化してしまったのです。

とにかく、空間とモノとがバラバラであったのです。

しかし現在は、変わってきていると私は感じています。今ある自分の空間に対し、どんなプロダクトをチョイスし、素敵な空間にするか、そして家族や来客者が快適に暮らせるようにするかをみんなが考え始めていると思います。

プロダクトデザインの何をチョイスするか

――一般の方が読む雑誌に、インテリアに関するプロダクトの情報が溢れてきています。それらが一般の方から注目を浴びるようになり、「このモノを置きたい、このモノに囲まれて暮らしたい。そういうことを実現できる空間がほしい」。そういった空間に対するニーズが、消費者から課せられるようになってきました。

喜多　そうですね。それはたとえば、今ある空間をイノベーション、リフォームし、快適にするという動きにも現れているようですね。そういったときに、プロダクトデザインされたものを自分なりに何をチョイスするか。プロダクトデザインは、今や日本製、外国製を

問わず氾濫していますが、それらの中でどれをチョイスするかが、大変重要になってきました。

――戦後、LDK・LD・DKといった生活スタイルが持ち込まれました。それは当時、食寝分離という考え方によって、キッチンやダイニングというように、部屋ごとの機能を分離していったわけですが、その意識とともに、その中に置かれる家具などのプロダクトも、空間の演出よりもまず、機能ということでしか受け入れられてこなかったのではないでしょうか。

喜多　まさにそうですね。ただモノを入れられたらいい、空間を埋められたらいいとか…。モノと空間とのバランスを考えるゆとりがなかった。日本の暮らしぶりは、戦争の被害が大きかっただけに後回しになってしまっていたようですが、いよいよこれからは、バランスのいい空間そして住まいが重要になってくるかもしれません。

暮らしぶりに関しては、急速に新しい生活文化を取り入れてきたために、今までは何がどれだけ必要で何が必要でないかが、わからなかったのです。しかし、いろいろ試行錯誤してきた結果、今は大体はっきりしてきたのではないでしょうか。こういう暮らしが快適なんだ、こういうモノをこれだけ並べれば素敵な空間になるんだ、光をこう当てれば楽しいんだ…、というように。

――デザインする立場の建築家やインテリアデザイナーなど、もともとバランス感覚が優れていないといけない人たちが、今までプロダクトのチョイスに無関心であったと思われます。

喜多　ひとつには、人々の生活が大変混乱していたために、まず空間をつくろうとしたんですね。そのために、主役である暮らす人たちの日常をさておいてきたのです。しかし最近では必然的に、暮らしが主体となり、自分はどんなソファがいいのか、どんな大きさのテーブルや椅子がいいのか、というように人々が目覚め、チョイスし始めたのではないかと私は思います。

その刺激になるのはマスメディアです。テレビとか雑誌とかがインテリアのことを盛んに取り上げるようになりました。もうひとつには、日本の住まいには、人が訪問する、人を招くことが少なくなっていたことがあるのではないでしょうか。素敵な家をつくって人を呼びたくなるような空間をつくり出す。それを決定づけるのは、どんなプロダクトをチョイスするかによるのです。プロダクトを組み合わせて、どう空間を演出するか。これからはそういったことを普通の人の目線でやっていければよいのではないかと思います。

ヨーロッパの人々は料理や服装よりも、何よりインテリアが一番楽しいと考えています。インテリアコーディネータと一緒にインテリアをつくることももちろんありますが、多くの場合は住まい手が自らプロダクトを選ぶことでインテリアを楽しむのです。楽しんで選んだモノが家に来ると嬉しい。そうやって気に入ったモノが家に置かれると、友人を招きたくなる。これが生活であり、日常の暮らしとはそういうことを言うのです。



2003年ミラノ・サローネ新作発表

日本は、こういうことをせずに走ってきました。これからは本来の暮らしに戻っていくのではないかと思います。そうなると、日本のプロダクトデザインは厳しい目で見られるかもしれません。今までは家具を選ぶにしてもバーゲンでとか、この金額の範囲でというような選び方でしたが、最近では、いくら高くても自分の気に入ったものがほしいという傾向が出てきています。探し回って気に入ったものを見つけたときは、本当に嬉しいものです。

友人を家に招き、わいわい話をして楽しかったと思うことが暮らしなのです。心豊かな生活というものは、このようなことを言うのだと思います。生活する主人公のことを考えることが大事なのです。

なんとなくスタンダードの中に埋もれて

――これからは、住まい手のプロダクトに対する選択肢の幅を広げることが重要と捉えたとき、空間を提供する建築側の考え方としては、できるだけプレーンな、あるいはフレキシブルな空間づくりが求められているということでしょうか。また現実には日本ではマンションの仕様を選ぶ際、標準仕様のものからオプションをつけていく形が多いのですが、ほとんどの入居者は標準仕様を選択する傾向があります。

喜多　家をスケルトンでお客様に渡す。それはひとつのやり方だと思います。スケルトンで住宅を受け取った方が、インテリアコーディネーターに依頼し、自分の家を相談しながら一緒につくっていく。これはヨーロッパではよく見受ける風景ですね。また、マンションの選び方の傾向については、これはインテリアをコーディネートす

ること、住まいをつくり上げることがいかに楽しいかということを忘れてしまっている。そして暮らしの目的を軽く考えてしまっていると思います。実際には、そのプロセスすべてが日常の暮らしであり、人生のひとつの時間の過ごし方であるのに、つい省略してしまいがちになっているのです。

しかし、現在は昔と違い、メディアやショールームなどによってインテリアに触れるいろいろな機会があります。自分に適切なプロダクト製品は、店を訪ねまわったり、通販カタログで選んだりするだけではなく、手にとり、触り、寸法を測る行為がもっとあった方がよいと思いますね。。皆、忙しくしていますが、その忙しい中でそういった行為を取り込んでいかないと、なんとなくスタンダードの中に埋もれて、目標のない暮らしぶりになっていってしまいますから。

プロダクトの作り手として

――次は、プロダクトの作り手側についてお話を伺いたいと思います。モノを作る側の人は、机は机、椅子は椅子というそれぞれ単独のモノだけで考えるのではなく、それらが置かれる空間を意識してデザインされると思いますが、喜多さんがデザインをされるときの切り口とは、一体どのようなものでしょうか。

喜多　私の場合、製品を自分で作って自分で販売するわけではないですから、企業から依頼が来るところから始まります。

まずその企業が誰に向かって、何を望んでいるか。そしてその企業がマーケットに何を提供できるのか。持てる資本やノウハウ、確保している顧客、そしてこれから獲得したい顧客像はどういったものか。そういったことを理解することに努めます。そしてこういうモノを作れば、この企業は栄えるに違いない、喜んでくれるに違いないというバランスの良いところを探し回るのです。これが私のデザインという行為です。

その一方で、人の暮らしぶりというものを想定に入れて考えていかないと、商品は動きません。できるだけヒットする商品を作ろうと思うと、それには暮らし方や、マーケットの研究が必要です。消費者がどういうモノを求めているかをキャッチし、想像するのです。その際、暮らしぶりや住まいの状況ということを頭に入れておかないと、とんでもないことになってしまいます。

プロダクトをデザインする場合、それを使う人（消費者）がポジティブに動くように、作る側（企業）もポジティブに動くように、ということしか考えられないですね。

「AQUOS」での実験

――次に、「AQUOS」についてお聞かせください。

喜多　プロダクトをデザインするとき、自分自身が消費者になりきると同時に、企業（供給側）の立場になりきることがとても重要です。自分だけの一品製作ではないからです。

「AQUOS」はインターナショナルな商品となりました。相手となる消費者はアメリカ人、フィンランド人、日本人、様々です。また、企業からは「企業の顔を作ってください」という依頼が来ました。多くのプロダクトデザインには、世界に事例があり、それを資料として判断できますが、「AQUOS」にはそれがなかったので、これは、ひとつの大きな挑戦でした。事例のないところに、オリジナル商品をぶつけたのです。

――AQUOSのCMは建築空間とAQUOSと吉永小百合さんというコンビネーションがとても印象的で、人々に強烈なインパクトを与えたと思います。

喜多　吉永小百合さんがとても身近で親しみを感じられる、そして憧れのようなものも持ち合わせている、そういったものがあったの

PHOTO : Christph Kicherer



でしょうね。また建築空間については、私自身がAQUOSのデザインに対して、空間を特に意識したわけではありませんが、常にあのような空間にも十分に耐えうる商品づくりを心がけています。AQUOSは、邸宅やホテルのロビーやガレージの横など、あらゆる場所に耐える商品です。とにかく大量に販売していくものであるわけですから、世界のどの場所にも合うデザインにしていかなければいけません。デザインとはバランスです。ある特定の空間をイメージしたのではありません。デザインはニュートラルなものにしています。ニュートラルとは、たとえばAQUOSは最初はシルバーで出しましたがその後はチタン色にしたように、様々なユーザーに対すると同時に、時代とともにニュートラルであり続けることです。

あくまで一品製作ではなく大量生産であるので、こだわりたいけれどこだわれないところもあります。そして、何万台も作らねばならないテレビ、月に50台作れば十分な椅子、月に10台もつくればよい製品では、それぞれプロダクトするコンセプトが変わってきます。生活者の像をかなり広く見なければならない大量生産のものと、ある程度限定する場合とがあります。

しかし、行き着く先はどちらも暮らしの現場です。その時代のテクノロジーに支えられたテレビやオーディオのように内容の変化の著しいもの、そして一生使いたいと思われる椅子やテーブルのようなもの、それらの両方が生活の舞台で同時に使われます。だから、人が主人公であり、その両方をどう使いわけるかということを想定しデザインするのです。

――漆塗りのAQUOSについて、お聞かせください。

喜多　日本は漆や紙など、昔から素晴らしい伝統工芸の歴史を持ってますが、今はそれらが日常の暮らしから遠ざかっています。それを消し去るわけにはいかないと思い、何かにこれを使えないかということで、たまたまAQUOSの新しいテクノロジーの仕事をする際に実験をしたのです。大量生産であるべきものについて、あえて正反対のことをひとつの実験として取り組みました。カスタムという名の受注生産品であり市場の規模は大きなものではないが、ヨーロッパのマーケットは、確実にこれを受け入れてくれています。

――住まい手がいて、その周りにモノがあって、そこに空間がある。それが暮らしなのだというお話をお聞きしてきました。このことはつまり、人が主役であるので、人に一番近いところにあるモノ（プロダクト）のデザインは、人と一緒に動いていかないといけないということですね。

喜多　これからの日本はハイセンスが必要だと思います。クリエーターやデザイナーたちが、どこからハイセンスなものを汲み取るかというと、それはすべて暮らしぶりからしかないのです。モノにハイセンスを求めるなら、人が一緒にハイセンスにならないといけません。

日本は、これからプロダクトデザインがメインになってくるでしょう。世界に発信できるハイセンスな日本オリジナルのプロダクトを作っていかねばならないと思います。ハイセンスなモノを作る土壌は生活の現場にあるので、今までのように納戸化した家では問題です。素敵な家にするために誰かを招いてお互いに切磋琢磨し、暮らしぶりの向上を図らねばならないと思います。家の大きい小さいにかかわらず、ハイセンスな暮らしを育てられる地盤を急いで築いていくことが今の日本には必要だと思います。

そういう意味では、AQUOSはひとつの実験であり、日本がどこまで世界を相手にオリジナルを作れるかという挑戦であったと思います。



PHOTO : Yoshiyuki IKUHARA

2004年4月9日、喜多氏のSTUDIOにて
聞き手　編集委員
西田和子／大林組本店建設設計・インタースペース部
阿部泰浩／都市再生機構西日本支社技術監理部

これからの冷蔵庫デザイン

有村敬三

近年、冷蔵庫のデザインに大きな変化が表れている。華美な装飾を施し、他社との見栄え競争に終始した時代から、少しずつではあるが空間における道具としての在りように目が向けられるようになってきた。

冷蔵庫が国内で生産されるようになって70余年。この間、様々な進化を遂げてきた冷蔵庫であるが、コアベネフィット（機能上の価値）での画期的進化が期待できにくくなってきた昨今、ステンレス冷蔵庫の出現に見られるように、より文化的・精神的価値に重きをおいたイメージベネフィットへの価値の転換が図られつつあり、デザインへの投資、訴求も年々高まってきている。また、ユーザー価値観の変化もインテリアやデザイン製品を多く世の中に流通させることの背景として考えられる。

それは単に、流行に敏感な世代特徴の表れというだけではなく、インテリアショップやセレクトショップ等の出現に見られる新たな流通の台頭、コンビニでも手に入るお洒落な通販雑誌や多くのデザイン特集記事等、快適空間創造を促す店舗、媒体の増加が顕著であることも価値観の変化に起因している。

結果的に「インテリア」「デザイン」という今まであまり馴染みが薄かった世界との接点が増え、距離が近くなったことで「こんな生活がしたい」という憧れを現実のものとする機会をユーザーが得たことになる。と同時にユーザーの審美観も向上し、より一層商品選択眼も厳しくなったことは言うまでもない。

冷蔵庫はファニチャーへ

冷蔵庫のデザインにおいても、それらユーザーの価値観の変化に呼応したかたちで、2003年3月にNR-D471N・同441N・421N（以下1Nシリーズ、**図1**）を発売した。この1Nシリーズの開発背景を紹介するとともに、今後の冷蔵庫の在り方を探ってみたい。

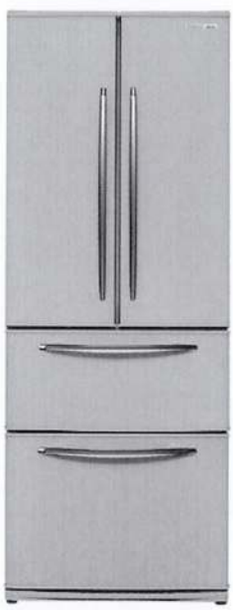


図1

「キッチンをもっと快適な空間にしたい」この思いが1Nシリーズデザイン開発の原点である。冷蔵庫をエレメントに、リビング空間のようにコーディネイトを楽しめるような環境が実現できれば、楽しい料理、食事を誘発できるであろうと考えた。そこにある冷蔵庫とは空間コーディネイトを意識したくなるファニチャー感覚を有した姿であり、多岐に及ぶ調査を通じてその検証活動を行った。

その礎にもなったのが、ベネフィットストラクチャ分析である。これは、あらゆるジャンルの商品を無作為に選び、おのおのの商品の選び方を、人間の心理面と行動面から分析するという手法である。そこから得られた結果として、冷蔵庫の選択方法は極めてファニチャーのそれと酷似しており、デザインを重視し、気に入ったものが見つかるまでじっくり選ぶ、という明らかに他の家電製品とは異なる特異なものであった。さらに、応用社会心理学を使った「憧れの空間ヒアリング調査」では数々のビジュアルコラージュから「陽だまりのようなやさしさ」「清潔な色合いと風合い」というエッセンスを得た。

これらの調査から、最終的に冷蔵庫デザインの目指すべき方向として「ファニチャーライク」というコンセプトを定めたのである。

目に映るものの変化

ファニチャーというコンセプトを具現化するために、冷蔵庫そのものは極めてシンプルな形状を考えた。しかし、かたちがシンプルであればあるほど、素材感が重要な要素としてクローズアップされた。奇しくもインテリアにも同じ言葉があてはまった。経年変化で見ると、インテリア空間の壁色は徐々に明るさを増し、同調して照明の明るさ（照度）も高くなってきている傾向にあった。明るくなったことで今まで目に映りにくかった素材や柄というものがより鮮明にヒトの目に飛び込んでくるようになった。すなわち素材の是非がこの冷蔵庫のデザインを大きく左右する要素となったのである。

素材色という概念

ファニチャーライクコンセプトの実現に向けて最もこだわったことは、従来にないドア面材の追求である。ステンレスのような冷たい素材ではなく、あくまでも「やさしさ・清潔感」を再現できる面材の開発に取り組んだ。

幾多のプロトタイプにトライする中で、透明素材に着目した。透明素材には「陽だまり」の持つやさしさや、水のように澄んだ透明感がある。ガラス素材の利用も考えたが性質上、表情がハードになり、また加工上の制約が多く困難であった。結果的にわれわれが辿り着いた素材は、樹脂の中でも極めて透明度、平滑性が高く、成形性に優れたアクリル素材であった。もちろん、ドア全面に使うのは世界初の試みであった。

一方で、キッチン空間カラーの傾向をベースに、カラーコンセプトメイクも進めてきた。そこから導き出されたのが「素材色」という概念である。光を内包する透明素材は、素材自身が「色」なのである。そしてそれは透明素材内に入射する光の量や角度により表情

を変え、人の心理にまで影響を及ぼす。ユーザーサーベイの際、お客様から「この冷蔵庫を見ていると癒される」という言葉を聞いたほどである。

清潔感という普遍性

透明感のある素材色には、水のような清潔感を感じることができる。日本人は高温多湿の風土に育まれ、水と深いかかわりを持ち、清潔を好む民族である。刺身のような生食を好み、靴脱ぎ文化を有した固有の感性は、日本人の心の奥底に清潔への普遍的志向が眠っていることを物語っている。毎年のように店頭での差別化、変化を求められる商品デザインにおいて、「清潔感のあるデザイン」を今後一つの普遍的なコンセプトとして根付かせたいとわれわれは考えた。この思いは、ナショナルデザイン統一コンセプトである「クリーンスタイル」へと繋がっていった。

「匠」のモノづくり

1Nシリーズが開発体制に入って間もなく、関連する多数の協力会社を事業所に招き、デザイナー自らが異例の「感性によるモノづくり」と題したデザインコンセプト発表会を開催した。

モノづくりに精通したその道のプロ集団に、1Nシリーズのデザインの意図を伝え、ハードルの高さを認識してもらった上で、培った匠の技と技術の粋の結集を促す場にすることが目的であった。

そのかいあってか、極めて光沢・透明度の高いアクリルの開発が実現し、デザインモデル以上の質感と品質を有したハンドル開発の成功を収めた（図2）。

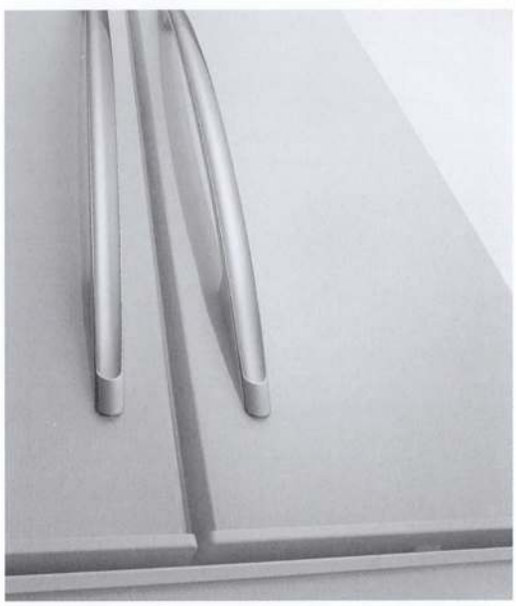


図2

余談ではあるが発表会直後、アクリル開発メーカーが「デザイナーの意図には到底及ばない」と、いったん納入したアクリルを全部回収する嬉しいハプニングもあったほどである。

これからの冷蔵庫デザイン

1Nシリーズによって一歩ファニチャーに近づき、キッチン空間に少なからず変化をもたらす術を見いだすことはできたが、われわれはこの1Nシリーズの商品化を足掛かりに、さらに理想を追求していかねばならない。その中で、今後冷蔵庫デザインは大きく二極化で進化していくと考えられる。一つ目はスタンドアローンとしてのさらなるファニチャー化。二つ目は徹底した設備・装置化である。

ファニチャー化の進化においては、シンプルに徹した姿を創りつつ、素材・色・質感において魅力をさらに高めていく必要がある。足し算によってデコラティブされたデザインが多数を占める中で、要素をそぎ落とし引き算で勝つためのデザインには際だったクオリティの高さが求められる。単に美しいとかキレイという目に映る世界だけでなく、手を触れてみて、音を聞いてみて伝わるクオリティの高さを追求することで、「感じるファニチャー」を実現せねばならない。シンプルな形態で空間調和を図りつつ、素材、クオリティによって単体としての魅力も高める、という二律背反する世界を創りあげていくことがわれわれの役割である。

一方、徹底した設備化では、ファニチャー化とは対照的に、消し去るためのデザインをする必要がある。それは単にシステムキッチンと顔を合わせるためのドアパネル交換という発想ではなく、あらゆる面において同化していくモノである。

現在売られているシステムキッチン用冷蔵庫はキッチンに合わせてドアパネルを交換でき、統一を図れるというモノであるが、それはあくまでも見た目だけの話であり、表面を除けば冷蔵庫とキッチンはまるで別物の感が拭えないのが現状である。

目指す姿は「システムキッチンと冷蔵庫の本質的融合」である。システムキッチンの持つユーザビリティ・クオリティをいかに冷蔵庫に注ぎ込むかが鍵である。そうすることで、システムキッチンと冷蔵庫とを違和感なく使いこなせ、冷蔵庫単体としての存在を感じさせない空間としての整合を高い次元で図れるはずである。

視点を人と空間との関係に移して

過去、台所と呼ばれた空間から、オープンキッチン、独立キッチン、そしてリビングキッチンへと空間が変化を遂げる中で、冷蔵庫本体は箱の大小での変化を遂げてきたに過ぎない。もっと人と空間との関係に視点を移し、新しい価値創造を行うことが今後われわれに課せられた重大な使命であることは間違いない。

（ありむら　けいぞう　松下電器産業株式会社パナソニックデザイン社
アプライアンスデザイングループ　クッキングシステムチーム主任意匠技師）

各論3

鉄道車両の空間デザイン

木村一男

鉄道車両の二面性

鉄道車両はエクステリアとインテリアにおいて、異なった二面性を持っている。エクステリアの社会的・環境的側面に対して、インテリアでは個人的・空間的な側面を強く持っている。新しい列車の登場は社会的トピックスとなり、沿線の人びとにも強いインパクトを与え、また周りの環境にも新鮮なイメージをつくり出す。そして、人びとの「一度乗ってみたいな」というあこがれの誘因となる。けれども、その列車の乗客にとってはエクテリアのデザインなど、極論すれば無関係であるといってもよい。発車間際に駆けこんだ人は、先頭部の形状はおろか、車体の色も記憶することはないだろう。

一方、インテリアの居住性や快適性は乗客と密接な関係にあり、大きい関心事であるけれども、走りすぎる列車を眺める人にとっては何のかかわりもない。もっとも、眺めていだいていたあこがれの列車に「乗ってガッカリ」という裏切りがあってはならないが……。4月に開業したばかりのKTX（韓国高速鉄道）は「苦痛列車」（朝鮮日報社説）と評判が悪い。普通車のシートが技術導入したフランスのTGVと同じく固定で回転できず、シートピッチが930㎜（新幹線700系は1040㎜）と狭いからである。あまりの悪評に後ろ向き座席の値段を割り引きにしたという。これなど「乗ってガッカリ」の一例であるが、こんなことがあってはならないのはもちろんである。

特異な鉄道車両の空間

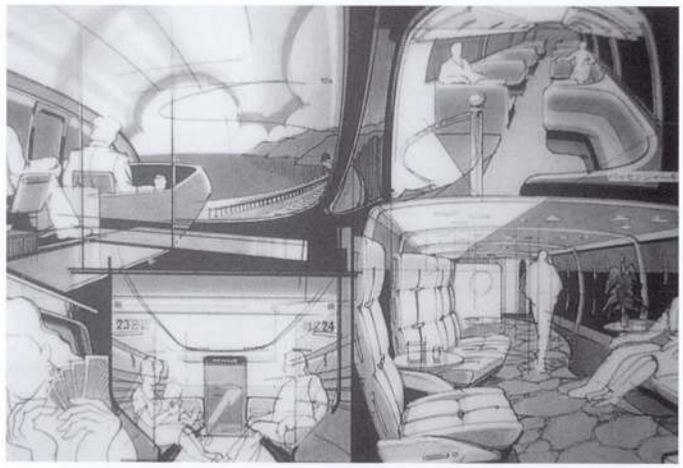
鉄道車両の大きさは、路線の構築物との関係から定められた「車両限界」によって規制されている。新幹線の車体幅は3400㎜、高さは床面高さ1300㎜に客室天井高さ2100㎜、冷暖房ダクトや屋根面から上部の高さを加えてレール面上4500㎜である。長さは25m。つまり極めて細長い特異なインテリア空間であり、これを自由に変更することは許されない。限界内の寸法では十分にある高さも、空気抵抗を少なくするために空調装置を床下に収納して低くする傾向にあり、300系は最初の0系に比べ、450㎜も屋根高さは低くされた。最近ではホームに安全柵が設けられることが多くなって、このために出入り口の位置も自由に変更することかできなくなった。もっとも在来線に比べ一回り以上も大きいサイズを生かして、十分な空間を持った2階建て車両（E1、E4系など）もつくられている。つまりこの定められた特異な空間をどうこなすかが、インテリアデザインのポイントである。しかし実際には乗車定員、便所洗面所などの諸設備、運転機器などの諸条件によって、0ベースからスタートする場合はともかく、新幹線のようなモデルチェンジの場合には自由になる余裕は極めて限られているのが現実である。

プランニングの実際

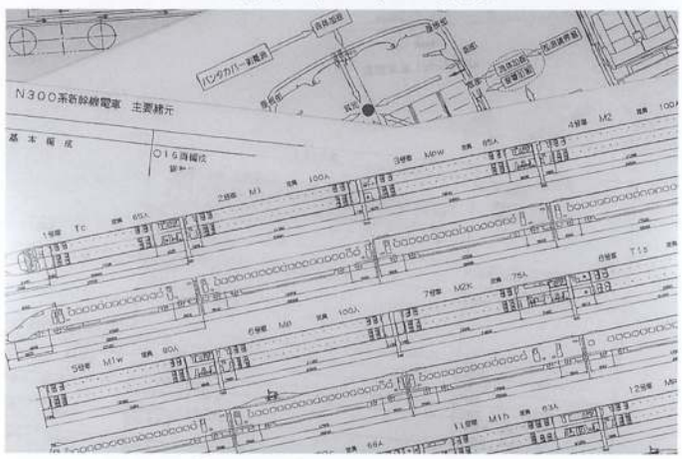
新しい車両の計画は技術上、運用上、営業上などの諸要件をまとめて基本計画がつくられ、それに基づいて俗に「割りつけ」と呼ばれる編成図がつくられる。これによって、座席、出入り口、便所洗面所、サービス設備などの配置や大きさなどがほぼ決められてしまうので、ここに至るまでの議論が重要となる。けれども前述のように東海道・山陽新幹線では1編成の定員1323人（うちグリーン車200人）ばかりでなく、各車両ごとの定員も変更は難しい。

これは各系列の列車がバラバラであると、運用や乗車券販売のコントロールなどが繁雑になってくるからである。現に500系は15mという長い先頭部のため先頭車両では出入り口が1カ所しかないが、このため乗降時間が多くかかって正常な運転にも影響を与えかねないことがある。

JR九州の787系（在来線の旧つばめ）のようにブッフェやコモン・スペースなど自由な空間をつくるために1編成中にもう1両加えられたなどは極めて珍しいケースである。それでも機器の配置を



コンセプト・イメージ・スケッチ



「割りつけ」と呼ばれる編成図



500系のモックアップ

工夫したり、現存の設備を見直したりして、少しでも身障者用の設備や新しいサービスのためのスペースを生み出そうと工夫している。

こうして車内のレイアウトが決まり、あわせて座席、照明、空調といった個々の設備、備品の方向・仕様を明確にして、それらの開発をスタートさせるとともに、インテリア全体のデザインのコンセプトをさらに練りあげて、まとめていくことになる。

それらは1/1モックアップに集結されて検討が重ねられていく。以前はモックアップがつくられるケースは少かったが、現在では客室だけでなく、出入り口、便所、洗面所部分までもつくられるようになった。また、2階建て車両では空調ダクトの配置やその効率が問題で、その検討のために1両分のラフなモデルがつくられたこともあった。

こうして最終仕様がまとまると製作設計へと進むのだが、新幹線ではまず1編成の試作車両がつくられ、約1年にわたる走行テストがくり返され問題点が生産設計にフィードバックされて、本格的な量産へと移行することになる。通常走行テストは約50万kmに及ぶ。

このようなステップを経て、お客様に乗っていただく晴れの日を迎えるまでには、プランニング段階から約4年近くの歳月を要する。

きびしい諸条件

鉄道車両の開発に当たっては、特有のさまざまな要求や条件が課せられる。なかには法的な規制として定められているものもある。

1）軽量化　新幹線のような超高速度車両では、何よりも軽くすることが求められる。普通車の座席は100系では1席当たり約27kgだったものが、300系以降は約13kgとなり、目下開発中のN700系では10kgを目標としている。回転やリクライニング機構込みの値である。シート地も1m当たり約400gときびしい。もちろん座り心地は一層向上させなくてはならない。

2）難燃化　火災対策として、車両に用いられる素材は車体自体を構成するもの（側壁など）は不燃性、あとで付加されるもの（カーテンなど）は難燃性で、それぞれの基準に合格していなくてはならない。木材などは樹脂を含浸させて耐火性を増したものが用いられる。韓国・大邱での地下鉄火災事故があってから、日本でも目下基準の見直しが行われており、一層きびしくなる方向にある。

3）安全性　鉄道はさまざまな乗客が利用するので、時に思ってもみないような使われ方がされる場合もある。その場合でも問題があってはならず、より念を入れたチェックが必要であり、十分な安全率がかけられている。座席につけられているテーブルの設計許容重量は25kgであるが、これはトランクで片手では簡単には持ち上げられないほどの重さである。ヨーロッパでよく用いられている外開き式プラグドアも、日本では高速でトンネルに進入した時に吸い出されて開くおそれがあるとして採用されていない。

4）生産性　乗用車では数万台単位の生産は珍しくないが、鉄道車両では時には数両、多くても数百両である。したがって大がかりな型代や治工具を要する生産手法を用いることはできない。一方、いかにして生産効率を上げるかという課題は、鉄道車両の場合も同様である。ユニット化、共通化、標準化や新素材、新工法によっての解決は、プランニング段階から検討しておかなくてはならない。

5）環境問題　かつては鉄道の便所はたれ流し式が当たり前だった。今では循環式などが採用されてそれはなくなったが、今でもヨーロッパでは依然このスタイルを見かける。現在は騒音や振動問題に加えて、素材面での課題が大きくクローズアップされてきた。座席で一般的だったウレタンフォームや塩化ビニールの化粧シート、床材などは使用できなくなった。廃材処理やリサイクルは、素材選定の新たな必須項目である。

これからの課題

まずは、鉄道にいかに新しい魅力を加えていくかである。航空機や乗用車との競争は激しく、生活のスタイル、乗客のニーズも大きく変わりつつある。その中でなお選択される乗り物であるために、鉄道ならではのゆとりある空間や設備が提供されなくてはならない。

鉄道はもともと環境負荷の少ない交通手段だが、一層の効率向上とともに騒音、振動も課題であり、それには軽量化や空力特性の向上が求められる。素材のリサイクルや無公害化はもちろんである。

情報化時代を迎えて、積極的な対応が必要だが課題も多い。携帯電話の扱いなどはその一例であるが、まだその解決策を見いだしていない。パソコン用電源はようやく一部に設けられるようになった。

ユニバーサルデザインへの取り組みも重要である。現在でも優先座席や身障者用の便所が設けられているが、十分とはいえない。現行のものでは、今後普及が予想される電動車椅子では利用できない。

鉄道は多くの交通機関の中でも地球温暖化への対策、エネルギー効率、そして安全性や信頼性という視点からみて、これからますます重要な存在になる。そのためにもデザインが果たさなくてはならない役割はますます大きいのである。

（きむら　かずお　名古屋学芸大学メディア造形学部教授）

「大阪・工事監理の星」支援システム

山本　強
大阪府建築都市部建築指導室建築企画課

「大阪・工事監理の星」建築士事務所

社団法人大阪建築士事務所協会（以下「事務所協会」という）と大阪府は、工事監理業務を普及、促進させるため「大阪・工事監理の星」支援システムを平成15年度に創設した。第１期の「星」と認定された建築士事務所は、92である。事務所名は事務所協会ホームページで公表している。

http://www.oaaf.or.jp/11_kouji_kanri/11_kouji_kanri.html

制度創設の背景

１．工事監理の法的位置づけ

工事監理とは「その者の責任において、工事を設計図書と照合し、それが設計図書のとおりに実施されているかいないかを確認すること」（建築士法第２条第６項）である。

一定規模以上の工事の工事監理は建築士でなければできず、建築主は建築物の工事を行う場合「建築士である工事監理者を定めなければならない」（建築基準法第５条の４第２項）。

さらに、工事監理者のいない「工事は、することができない」（同第３項）ことになっている。

２．工事監理業務の現状

法律上、建築工事は建築士が工事監理を行うことが前提とされているが、工事監理業務が徹底して行われているとは言いがたい。その背景として考えられるのは、建築主は発注者であり、建築士は受注者であるといった市場原理がある。

建築主は施工者に絶対的な信頼をおいているためか、工事監理への知識がないためか、とにかく現場は施工者に任せておけばよいと考える性向がある。したがって「工事監理」業務を、報酬を支払ってまで必要な業務とは思わず、工事監理にかかる費用を余計な出費、または建築士の過分な請求とみなす。これは、同じ建築士に対し当然に支払っている「設計」料とは、対照的なものとなっている。

一方、建築士は建築主から工事監理業務への理解がなかなか得られないため、報酬を得ることに対し、諦めに近いものがあるという。そして、工事監理委託契約による確かな報酬の保証もないままに、したがって明確な業務への責任感もないままに、慣例として確認申請書には工事監理者として記名をしてしまう（しかし、これについて最高裁が平成15年11月14日、工事監理名義貸しの建築士は賠償責任を負う判決を言い渡したことは、記憶に新しい）。

このように、建築主は工事監理業務への対価を支払いたがらないこと、建築士は報酬がない（または、十分でない）ため、工事監理業務に力を入れないといったことが、工事監理業務が定着してこなかった構図と考えられる。

「大阪・工事監理の星」支援システム

このシステムは、上述のような状況にあっても、工事監理業務に真摯に、かつ積極的に取り組み、建築士事務所の模範といえる事務所には光を当てたい、という思いから発想された。その具体的な手法として、「大阪・工事監理の星」として認定・顕彰する制度となった。

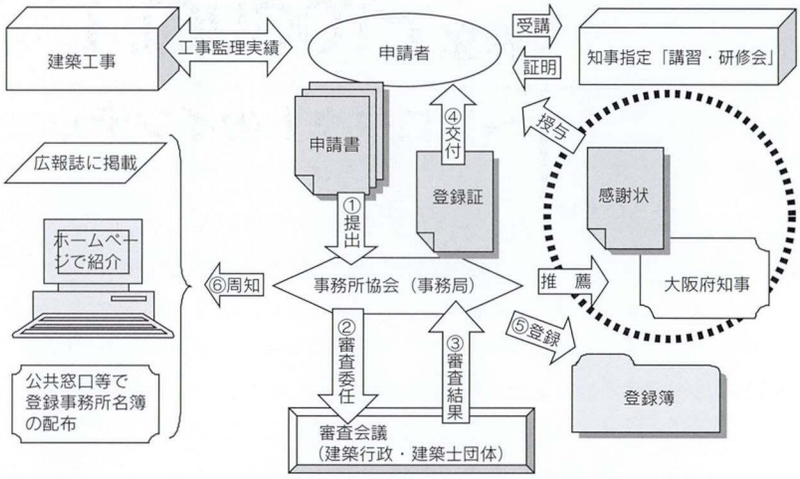


図　「大阪・工事監理の星」支援システムの体系図

上図は、システム体系をまとめたものである。

このシステムは、事務所協会が優良な建築士事務所を認定・登録し、それらの建築士事務所に大阪府が感謝状を交付する、いわゆる官民連携による体系としている。

優良工事監理建築事務所の認定・登録

対象者は大阪府に事務所登録をしている建築士事務所である。

①申請者は「知事指定講習会又は研修会を３年以上継続しての受講実績」があること、かつ、「２年以上の工事監理実績」のあることを証する申請書を提出

②事務所協会は審査会議（建築行政・建築士団体等で構成）に、審査を委任

③審査会議は、適格審査の結果を事務所協会に報告

④事務所協会会長は、申請者に登録証を交付し、大阪府知事に感謝状対象者として推薦

⑤、⑥事務所協会は登録及び周知を行う

大阪府知事の感謝状交付

知事は、事務所協会から推薦を受けた建築士事務所に対し、感謝状を交付する。（図の点線円部分）

「大阪・工事監理の星」支援システムの効果

工事監理は、建築士にしかできず、そして建築士でしか業務として定着させることができない。このシステムは、これまで工事監理にあまり関心のなかった建築士事務所が、ステイタスとしての「星」をめざして、積極的に工事監理に取り組むためのインセンティブになることを期待している。また、「星」として広く公表することによって、府民にとってはこれまでなじみの少なかった工事監理者が、選定しやすくなるのではないかと考えている。

工事監理者は、工事中に不具合が発見されれば施工者に注意を与え、建築主に報告することが責務である。この業務が適切に行われれば、違反建築防止と欠陥・手抜き工事の防止に期待が持て、消費者保護の観点からも有効である。個々の建築物に適切な工事監理が行われることは、安全・安心な社会基盤を形成していくことであり、建築防災、都市防災を考える上で非常に重要である。

多くの建築士事務所が、本システムを契機に、積極的に工事監理業務に取り組んでもらいたいと思っている。　（やまもと　つとむ）

ガラスの最前線

サブストラクチャーとしてのガラスの可能性

高橋一教
旭硝子ビル建材エンジニアリング㈱システム事業本部関西支社設計部部長代理

DPG工法登場以前

DPG工法の登場によって、ガラスの使用部位や用途は格段に拡がった。DPG工法を支える技術として、孔明け加工の精度、ガラスの強化処理技術の発達と孔周りの応力解析技術の確立があげられる。

DPG工法が登場する以前のガラスはサッシ枠にはめ込まれたり、SSG工法によってシールで保持されたりして、ガラスそのものの解析に関してはメーカーのカタログに記載されている計算式にのっとった“電卓で計算できる”レベルのものであった。この背景には、孔明け加工をしたり、切り欠き加工をしたガラスに荷重が作用した場合、どのような応力が発生するかシミュレーションする技術がなかったためで、JASSの規定にのっとり、切り欠き、孔明け加工したガラスは強化ガラスとすると定められているように、“どのくらい応力集中が起こるかわからないが、とりあえず強化にしておけば問題ないだろう”と定性的な判断であり、定量的に判断することは出来なかった。

有限要素法を用いた解析技術の進歩

コンピューター解析技術の発達で、有限要素法（FEM）を用いた解析技術が進歩し、定量的にガラスに発生する応力が予測されるようになった（図1）。そしてその解析技術を基に、様々なガラスの使用方法、用途が開発されはじめた。

そのひとつが「継ぎリブ工法」である。東京国際フォーラムのガラスキャノピーをはじめとして、ガラスファサードを支えるサブストラクチャーとしてのガラスの用途を開拓した工法だ。現在、国内で加工できる強化ガラスの最大寸法は3m×6mであるが、6mを超えるガラスファサードを支持するには従来どおり、透明フロートガラスを用いたリブ工法になっていた。昨今のガラスファサード大型化に伴い、従来のリブ工法では耐震上追従できなくなったり、またリブ幅が大きくなることによるデッドスペースの増大等、透明フロートガラスを使用したリブ工法には限界があった。継ぎリブ工法は、孔明き強化ガラスをボルトでつなぎ合わせることで、長大な梁を形成し、ガラスファサードを支持するものである（図2）。

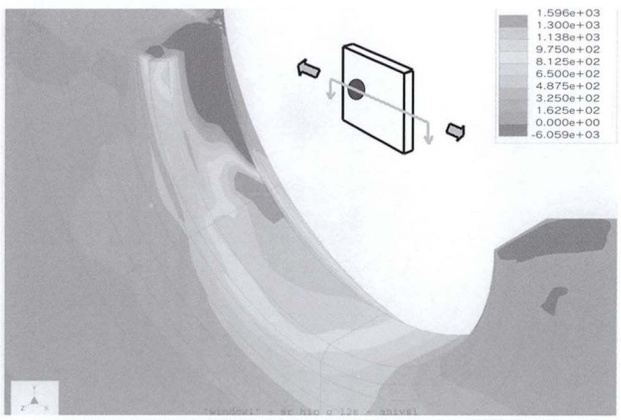


図1　ＦＥＭ解析による孔周り発生応力分布図

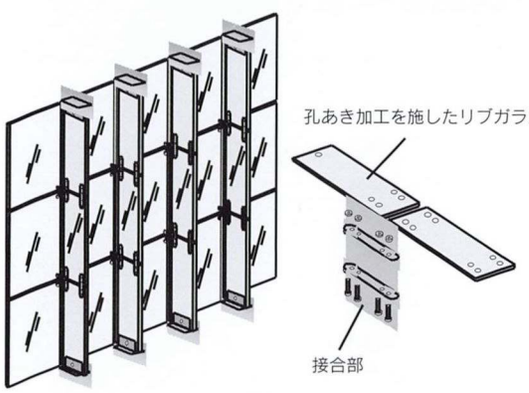


図2

万一のガラスの破損や大きな力を負担することを考えると、継ぎリブを構成するガラスは合わせガラスとなる。ガラスを連結する方法には、ボルトによる連結方法以外にも、摩擦を利用する方法や海外では3枚の合わせガラスの中央のガラスを、一方を伸ばし、他方を引っ込めて（木造の仕口のようなディテール）それぞれを組み合わせ、樹脂を注入し一体化させる方法も行われているようである（図3）。

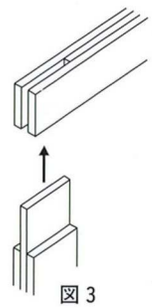


図3

ガラスの構造的な使用方法

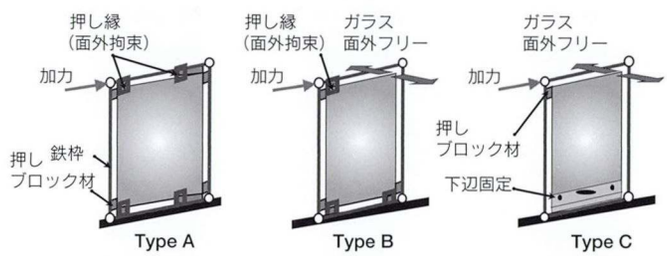
ガラスの構造的な使用方法として“ブレース”が考えられる。これは、“ガラス耐震壁”や“ガラス制振壁”として研究が進められた。ガラス耐震壁はガラスの面内剛性を利用して、地震時の水平力に対しブレース効果を持たせようというものである。従来のガラスの耐震性能の考え方はサッシ枠の変形に対し、ガラスはスライドとロッキング（回転）によって逃がし、決してガラスに圧縮力が伝わらないようにガラスとサッシ溝底部のクリアランスを設計するいわゆる“変形追従型”である。ガラス耐震壁は、ガラスの4隅にブロックを詰め込み、水平力をガラスに伝達させ、その面内剛性によって変形を止める“変形防止型”である。この工法を成立させるためには、ある水平力に対し、ガラスがどの程度水平力に耐えうるのかをシミュレーションできるかにかかっている。そこで、実大サンプルにより様々なケースを想定した実験を行った。ガラスの支持条件、品種、ガラス厚の違いによって破壊荷重にどのような差異が生じるかを確認した。

まず支持条件として、

TypeA：ガラスの4隅にブロック、上下面内を拘束したもの

TypeB：ガラス上端の加力点と反対側を面内外ともフリーとしたもの

TypeC：ガラス下辺を固定端とし上辺をフリーとしたもの



硝子サイズ：W900×H1800　硝子品種：FL8・FL12・FL15・PT12

図4

以上の3Typeの支持条件において、品種とガラス厚を透明フロート8ミリ・12ミリ・15ミリ、強化ガラス12ミリで実施した（図4）。

この実験結果から“ある荷重以上でガラスの面内変位は急増する”ということがわかった。これはガラスの座屈現象を現すものである。また、板厚と破壊荷重の関係（図5）から“同じ支持条件下であるなら破壊荷重は板厚の3乗にほぼ比例”し、“引張り試験と比較して測定値のバラツキが非常に小さい” “同厚であるならフロートガラスと強化ガラスでは、破壊荷重に大きな差異はない”ことがわかった。この結果を受け、有限要素法によるガラスの座屈解析を実施したところ、実験値と解析結果は非常に近似した結果を示した（図6）。有限要素法によるガラスの座屈解析が可能となっても、安全率をどう考え、許容座屈荷重をいくらに設定するかは重要な設計ポイントである。部位、用途によっては合わせガラスにするなどの安全対策を考慮するべきである。

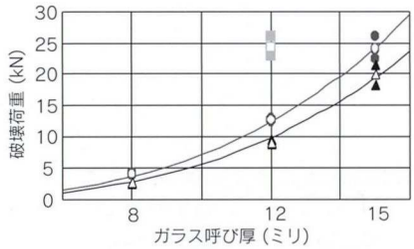


図5　板厚と破壊荷重の関係

・引張り試験に比べて、バラツキが非常に小さい。
・破壊荷重は板厚の3乗にほぼ比例する。

単位：kN

変形モード	Type A		Type B		Type C		
座屈荷重	実験値	解析値	実験値	解析値	実験値	解析値	既存式
FL8	4.1 (3.2)	3.7	2.7 (2.2)	2.3	–	–	–
FL12	12.7 (9.8)	12.2	9.0 (7.8)	8.3	24.3 (21.6)	23.3	13.5
PT12	11.3 (9.8)		–	–	–	–	–
FL15	24.1 (19.9)	24.8	20.0 (18.3)	16.9	–	–	–

実験値：
上段は破壊荷重平均値、下段は概略座屈荷重平均値を示す。

図6

ガラス耐震壁とガラス制振壁

地震時の揺れに耐えて変形を抑えるものを耐震壁とするならば、地震時の建物の振動を吸収し減衰させる制振壁にもガラスを用いることが可能である。制振構造には地震時の揺れを吸収させるダンパーが不可欠であるが、ガラス制振壁も同様で、躯体とガラスの間でダンパー的役割を果たすものが必要となる。

今回ガラス制振壁に採用されたダンパーは、VEM構造ダンパー「Scotchdamp」である。VEM（Visco Elastic Material）は、非常に優れた性能を持った粘弾性体である。

・変形を熱に変換して振動を抑える。
・アクリル系粘弾性体であり、高耐候性である。
・透明であり、自己接着性がある。
・温度依存性がある。
・鋼板との組み合わせによる制振ダンパーとして、長年の実績がある。

等の性質がある。このVEMをガラスと躯体との間に設けることにより、ガラスを柔らかく取り付け、ガラスに荷重を集中させない（粘弾性体の変形により力を分散）機構が可能になった（図7）。この工法の有効性は、実大試験においても確認されている（図8、9）。

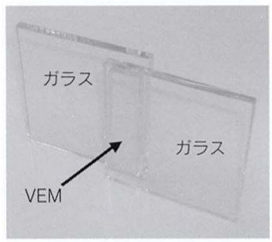


図7

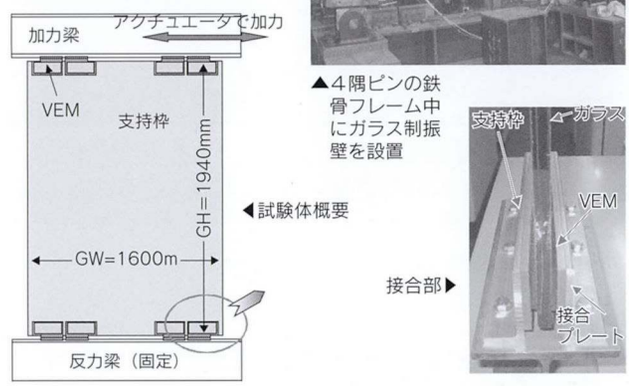


図8　実大スケールのガラス制振壁に動的アクチュエータで正弦波加振

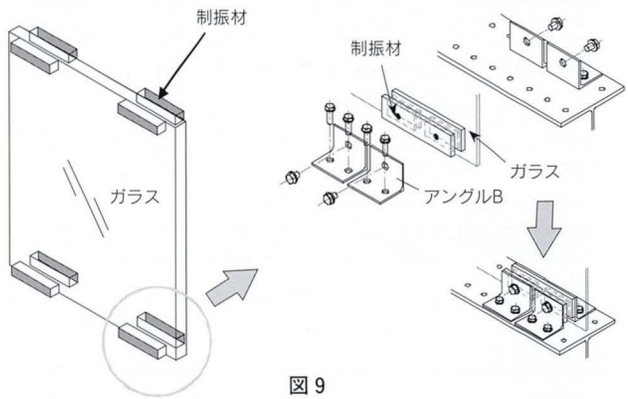


図9

今後、このようなガラス耐震壁やガラス制振壁が考えられる用途として、ビル、古建築などの耐震機構・制振機構が考えられ、従来のコンクリート壁のような閉ざされた空間ではなく、透明間仕切りとして、快適な居住空間を提供できるであろう。

サブストラクチャーからメインストラクチャーへの展開

メインストラクチャーに対して、カーテンウォール等の支持材としてのマリオンや梁、ブレースはサブストラクチャーとしての位置づけであると考えられる。現在ガラスは、そのサブストラクチャーとしての構造材として用途を開拓したと言えるであろう。海外ではメインストラクチャーの柱としてガラスを使用している例も見受けられる。日本においては“火”の問題があり、すぐさまメインストラクチャーへの展開は課題が多いことであろう。しかし、“いつの日か”との期待は膨らむばかりである。

（たかはし　かずのり）

大阪芸術大学博物館所蔵品展

1910年～1920年後半には、蓄音機とレコードはホームエンターテインメントの主役であった。
大阪芸術大学では、所蔵するアメリカのビクター社の蓄音機13台、当時のSPレコード、蓄音機のカットモデルやホーン、ゼンマイなどの部品を、「ビクターの黄金時代を築いた蓄音機たち」展で展示する。入場無料。
会期　2004年6月28日（月）～7月26日（月）
　　10：00～16：00　7／4、7／11は休館日
会場　大阪芸術大学構内
　　地下展示室（芸術情報センター地下1階）
　　大阪府南河内郡河南町東山469
　　近鉄南大阪線「喜志」駅下車、大阪芸大スクールバスまたは金剛バス「東山」下車

「チャイナ・ドリーム」展

兵庫県立美術館で開催される「チャイナ・ドリーム　描かれた憧れの中国ー広東・上海」は、アジア独自の近代美術の文脈を構築することを目指すもの。
18世紀に西洋人向けに制作された作品、19世紀前半の「チャイナー・トレード・ペインティング」、20世紀前半の商業ポスターとその原画、中華人民共和国になって制作された「新年画」などを紹介する。


ウィリアム・サンダース《纏足の上海婦人》　1870年
福岡アジア美術館所蔵

会期　2004年7月24日（土）～8月29日（日）
　　10：00～18：00（金、土曜日は20時）月曜休館
会場　兵庫県立美術館　企画展示室
　　神戸市中央区脇浜海岸通1ー1ー1
　　阪神電車「岩屋」駅下車、徒歩8分
入場　一般1200円、大高生800円、中小生400円
招待券希望者は、日本建築協会（06-6946-6981）へ。

“建築材料から「環境」を考える”

㈳日本建築材料協会「建材情報交流会」では、下記講座をシリーズで開催しており、ホームページ（http://www.kenzai.or.jp）でも参加者を募っている。
会　場　大阪科学技術センター
　　大阪市西区靱本町1ー8ー4
定　員　先着60名
参加費　日本建築材料協会会員500円、一般1000円
●第10回　省エネルギーPART-II
2004年8月5日（木）13：30～16：30
「屋上緑化、ソーラー発電等による省エネルギー」
問い合わせは、TEL06-6443-0345へ。

第24回大阪まちなみ賞募集

大阪府域内の建物及びまちなみを対象として、景観上優れたものを表彰してきた大阪都市景観建築賞（愛称大阪まちなみ賞）は、ハガキ及びホームページにより推薦を受け付けている。受け付けは7月31日まで。
●建物：1999年8月～2003年7月末に完成したもの（建築確認申請が必要な物件については、検査済証が発行されていない場合は対象外となる）
●まちなみ：2003年7月末までに完成したもの
推薦された建物やまちなみについて審査し、この賞にふさわしいものに大阪府知事賞、大阪市長賞、大阪府建築士会会長賞、特別賞、奨励賞、緑化賞が授与される。表彰発表は11月中旬予定。
問い合わせ・推薦ハガキ送付先は、大阪都市景観建築賞運営委員会（〒540-0011　大阪市中央区農人橋2ー1ー10大阪府建築士会内、TEL06-6947-1961、FAX06-6943-7103）。またはhttp://www.pref.osaka.jp/kenshi/utukusii/machi.htmへ。

滋賀県立大学で教員公募

滋賀県立大学環境科学部、大学院環境科学研究科では、教授1名（環境建築学、環境計画）、講師1名（環境建築学、サスティナブルデザイン）を公募している。いずれも採用予定は2005年4月1日。国籍は問わないが、日本語による講義が可能であること。
履歴書、研究業績リスト等の応募書類提出は2004年9月1日（当日消印有効）。
問い合わせは滋賀県立大学環境科学部（〒522-8533滋賀県彦根市八坂町2500）へ。書面のみで受け付ける。
滋賀県立大学のURL http://www.usp.ac.jp

ecobuild賞応募作品募集

エコビルド実行委員会は、「地球環境・建築憲章」の趣旨に沿って取り組まれた建築、都市計画、これに類するもので、1990年1月1日～2003年12月31日に日本国内で竣工したものを対象とし、応募作品を募集中。
用途・規模は問わない。
応募登録　2004年7月1日（木）～8月10日（火）
作品提出　2004年7月20日（火）～8月20日（金）
　　電子データで提出
一次審査　2004年9月10日までに行い、応募者に通知
二次審査　2004年10月5日15時までにプレゼンテーションボード、テキストを提出
　　2004年10月13～15日ecobuild 2004会場内展示、公開プレゼンテーション、公開審査
問い合わせ・提出先は、エコビルド実行委員会事務局ecobuild賞係（〒112-0014　東京都文京区関口1ー24ー8　デルファイ研究所内、TEL03-5261-4551、FAX03-5261-5023、http://www.ecobuild.jp）。

「防犯建物部品の普及展」

日本ロック工業会は、“防犯性能を高めるリフォーム”をテーマに出展企業14社、出展団体4団体による2004ロックセキュリティ・フェアを開催する。
日時　2004年7月23日（金）10：00～17：00
　　2004年7月24日（土）10：00～16：00
会場　マイドームおおさか　1階展示場
　　大阪市中央区本町橋2ー5
　　地下鉄中央線・堺筋線「本町」、谷町線「谷町四丁目」下車、いずれも徒歩7分
展示　防犯性能を高めるためのリフォームが中心

ソールフォード市が都市計画のアイデアを募集

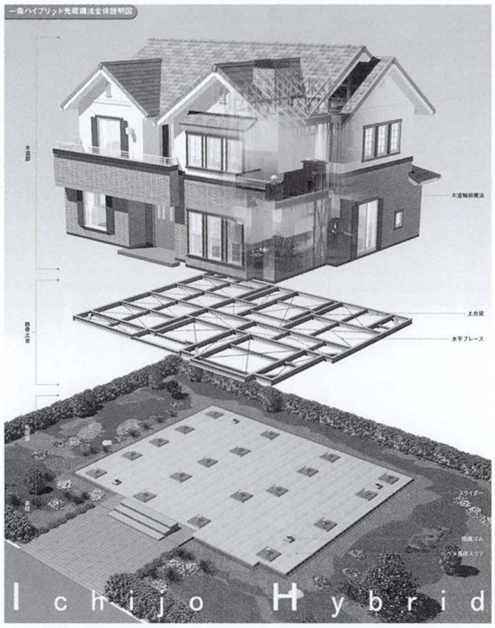
英国ロンドンの北西250マイルに位置するソールフォード市は、世界の建築家、デザイナー、プランナー、経済の専門家とのコラボレーションを求めており、同市の中心部をリニューアルし新しい息吹を与えるプロジェクト「ルネッサンス・ソールフォード」を立ち上げる。このプロジェクトの対象となるのは、Ordsall、Broughton、Irwell、Riverside、Langworthy、Kersal、Claremont、Weaste、Seedley地域を含む2000haを超える面積と72000人の人々。ソールフォードの情報はwww.salford.gov.ukに掲載。
Consultants Brief-CENTRAL SALFORD VISION AND REGENERATION FRAMEWORK（請求は、Colette.hilton@salford.gov.ukまたはmiyauchi@fleishaman.comへ）を一読の上、A4判10頁以内にまとめた参加申込希望（下記事項記入）を2004年7月16日までに提出する。
・応募者の、特に都市・地域のデザインプロジェクトにかかわった経験等の詳細
・応募者と共同で作業するチームとメンバーの詳細
・「ルネッサンス・ソールフォード」を実現するために必要なビジョン、課題に関する応募者の見解
なお団体で応募する場合は、
・チームの責任者を明らかにし、メンバー各自の作業分担を明確にする。
・過去2年以内に担当した都市・地域デザイン分野でのクライアントからの推薦状2通を添付
・選定委員会から送付する所定の申込書に必要事項を記入
書類提出　製本応募書類4部、及び製本前書類1部を郵送。さらに1部をCD-Rにし郵送、またはEメールで送付する。Faxは不可。
送付先　Colette Hilton
　　Contract Management, Corporate Services Directorate, Salford City Council, Civic Centre, Chorley Road, Swindon, M27 5FJ United Kingdom
Eメール　colette.hilton@salford.gov.uk
応募選考結果は、2004年11月に発表予定。

第6回「日本建築協会賞」入賞発表

日本建築協会賞

戸建免震住宅の研究開発とその実用化ならびに普及

株式会社 一条工務店 代表取締役社長　山本庄一



一条工務店は設立以来地震に強い家づくりをモットーに活動してきたが、その成果は阪神大震災で証明された。しかし「真に地震に強い住宅」をつくるため、技術面、制度面、コスト面などを見なおし、あらたな課題解決に取り組んだ。

まず、技術面ではすべり支承と積層ゴムからなるシンプルな免震システムを確立し、新たに開発した免震層の変位を制御するストッパーを組み合わせ、住宅特有の課題にも対応できる免震システムを開発した。また、制度面では、個別認定の問題点を解決するため、一般認定の取得や建築基準法改正対応としての「構造方法等の認定」を取得した。さらにコスト面では、シンプルな構造による免震化により、１階坪数あたり10万円台という低価格を実現し、維持管理費の削減も図られている。また、施主への安全・安心感保持のため、竣工後の保証については保証書等の発行により、充実した運用システムがとられている。

一条工務店の戸建免震住宅の着工件数は阪神大震災以降、約10年間で1000棟を超えている。これは全国の戸建免震住宅の約95%という驚異的な数字であり、同社の優れた住宅免震技術をしめすものである。2002年、日本免震構造協会より、日本免震構造協会賞技術賞（特別賞）を受賞。学術的にも高く評価されている。

日本建築協会賞

永年に亘る建築関連書籍の出版

株式会社 鹿島出版会 代表取締役社長　新井欣弥（当時）



鹿島出版会は昭和38年（1963年）３月、「出版を通じて文化の向上に寄与したい」という創立者鹿島守之助の基本理念のもとに設立され、平成15年に創立40周年を迎えた。

総出版点数は3000点を超え、建築系専門出版各社の中でも群を抜く出版点数を誇っている。とくに、同社の代表的書籍ともいえる「ＳＤ選書」シリーズは既刊 230冊、総部数 100万冊を超え、建築系学生をはじめ一般読者にも幅広く愛読されている。また、土木・建築関連の技術書の品目は業界屈指であり、単行本のほか、「建築構造学」や「土木教程選書」等の教科書、実用書のシリーズものも出版し、全国 200余りの大学・短大・専門学校などで教材としても採用されている。

なかでも、教科書「建築計画１」・「建築計画２」は発行累計が９万部以上に達しており、年々、採用校が増えている。

近年、出版業界を取りまく状況は情報の多様化と高度化によって様々な試みがなされているが、同社が年１回開催する「ＳＤレビュー」もそのひとつといえるものである。

これは、実施を前提とする建築作品を一般公募し、優秀作品を選ぶという設計コンペティションであり、若手建築家の登竜門的役割を果すものして注目されている。

「良書の出版」という創立時の原点を守る同社の様々な取り組みは各界から高く評価されており、過去1971年の毎日出版文化賞、1990年の日本建築学会文化賞など数々の賞を受賞。

永年に亘る同社の建築関連書籍の出版は建築界への貢献はもとより、わが国文化の向上に寄与するところ多大なるものといえる。

日本建築協会賞は、協会創立70周年（昭和62年）を記念し、これを契機として、建築界における総合団体としての性格にもとづき、建築に関わるあらゆる分野において社会に貢献した団体または個人に対して、その業績を讃えるとともに、わが国文化の向上と公共の福祉に寄与することを目的として創設されました。

今回、その第６回の実施にあたり、広く各界に応募を呼びかけましたところ、締切日（平成15年10月30日）までに、10件の応募がありました。

今回の選考に際し、第６回日本建築協会賞選考委員会（委員長：金多潔、同委員９名）にて慎重に審議いたしました結果、日本建築協会賞２件、日本建築協会賞特別賞２件を選定しました。

平成16年６月16日、日本建築協会平成16年度通常総会の会場にて表彰式を挙行し、それぞれの業績に対し、賞状並びに賞牌を授与いたしました。

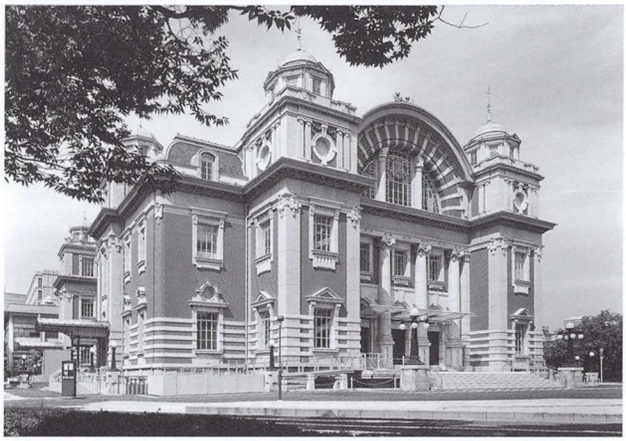
第６回日本建築協会賞選考委員会（順不同・敬称略）

金多　潔／京都大学名誉教授、前社団法人日本建築協会会長
井上　豊／大阪大学名誉教授、財団法人日本建築総合試験所所長
片倉　健雄／元近畿大学教授
鴻池　一季／株式会社鴻池組代表取締役会長
下笠　晃右／大阪地下街株式会社建設部長
立成　良三／財団法人大阪住宅センター理事長
堀田　修二／鹿島建設株式会社常務取締役関西支店副支店長
松岡　憲生／株式会社きんでん取締役副社長
八木　俊樹／株式会社安井建築設計事務所常務取締役大阪事務所長
和田　克朗／財団法人日本建築センター大阪事務所顧問

日本建築協会賞特別賞

大阪市中央公会堂の保存と再生、活用「大正浪漫を次世代へ」

大阪市長　關　淳一



大阪市中央公会堂は大正７年に竣工、昭和12年の大改装を経て平成11年まで、赤煉瓦の公会堂として広く親しまれてきた建物である。

昭和40年頃から、建物本体の老朽化や設備・機能上の問題にあわせ、公会堂を含む中之島地区の歴史的建造物の保存・再開発について議論されるようになった。

昭和63年、「保存の方向性」を決定した大阪市は平成元年、学識経験者を中心に「中央公会堂将来構想検討委員会」を設置、「保存・再生」のための具体的な方策が論議された。

平成３年、同委員会の答申をうけ、将来にわたり一層活用される「公会堂」に再生させるため、今回の保存・再生工事が実施された。

工事に際しては、外観の保存はもとより、耐震性能の不足を解決するため、「免震構法」が採用され、大規模な構造上の整備がおこなわれた。また、内部は空調・照明・音響等の設備の改修とともに、大正浪漫の香りを残す貴重な内部意匠等が全面的に保存修復され、歴史的、文化的にも優れた名建築が再生された。

平成14年、国の重要文化財に指定された大阪市中央公会堂、この度の保存・再生工事は、単に「残す」ための保存でなく、積極的な「活用」のために保存を行った事例として高く評価されるものであり、とくに都心に残る歴史的建築物の保存活用を考える上でもよき参考となりうるものである。

日本建築協会賞特別賞

二十一世紀の都心「六本木ヒルズ」の実現

森ビル株式会社 代表取締役社長　森　稔



東京・港区のほぼ中央で、約11.6haの大規模な民間再開発が完成した（2003年４月）。日本経済の大きな変動期をはさんで17年の歳月を要した事業であるが、明快なコンセプトを貫き、多数の地権者の合意を得て実現したことは、高く評価される。地元と結びついた数多くの業務ビルの建設を手掛けてきた森ビル㈱が、1986年に完成した複合ビル群アークヒルズの経験から、世界の中心都市の動向を視野に入れた、日本の首都東京の都心のあり方に、大きな提案を試みたものである。

それは21世紀の国際間競争に生き抜くことを目指す都心づくりで、高層化・コンパクト化することによって多機能を集約し、ゆとりを持った空間で自己表現のチャンスを増やそうとするものであった。「働く、住む、遊ぶ、憩う、学ぶ」機能を満たす街づくりを目指した。２本の幹線道路が通り、各国大使館やメディア関係、文化エンターテイメントなどが周辺に立地しており、必ずしもポテンシャルが高いとはいえない地域であったが、そのプラス面を積極的に生かす方針がとられている。

ランドマークとして計画された54階建のオフィスビル（上部５層は森アーツセンター）、ホテル、シネマコンプレックス、レジデンス４棟とテレビ朝日本社ビルを含み、駅前プラザ、毛利庭園（保存）と豊かなオープンスペースが実現している。また、低層部の多くが200を超えるショップ・レストランからなっており、新鮮な賑わいをもたらしている。

また、特定電気事業による発電、地域冷暖房、地域中水道、雨水利用施設、防災井戸を整備しているだけでなく、地区内の12棟の建物の管理組合と団地管理組合のほかに、これらを統一管理するタウンマネジメントが用意されている。

暑中お見舞申し上げます

平成16年盛夏

名誉会長

市　川　　宏

株式会社　東畑建築事務所 取締役会長

〒541-0044　大阪市中央区伏見町4―4―10　電話06（6202）0391

内　藤　正　克

株式会社　内藤建築設計事務所　相談役会長

〒675-1379 兵庫県小野市上本町240 小野ビル　電話0794（62）4757代
〒675-1362 自宅・兵庫県小野市久保木町1063　電話0794（62）4668

宮　本　博　司

株式会社　宮本工務設計事務所　代表取締役

〒665-0022　兵庫県宝塚市野上1丁目2番34号（宮本ビル）
電話0797（71）0431大代表
FAX0797（71）5139受信専
E-mail：mto@gold. ocn. ne. jp
URL：http：//宮本設計. jp. io
神戸支店　TEL&FAX 078-997-0371

奥　村　正　樹

株式会社　オクジュー　取締役会長

〒530-0047 大阪市北区西天満5丁目3番7号
電話06（6312）4131

中　村　光　男

日　建　設　計　　取締役社長

〒541-8528 大阪市中央区高麗橋4丁目6番2号　電話06（6203）2361

村　石　　全

株式会社クトクコーポレーション 代表取締役社長

〒556-0021 大阪市浪速区幸町2丁目5番3号　電話06（6568）3671
〒596-0011 工場・岸和田市木材町9番地の3 電話0724（37）2524
〒649-7167 工場・和歌山県伊都郡かつらぎ町移430番地
電話0736（22）7880

佐々木　　徹

西日本建設業保証株式会社　取締役社長

〒550-0012 大阪市西区立売堀2丁目1番2号　電話06（6543）2553

真　塚　達　夫

株式会社　東畑建築事務所　取締役社長

〒541-0044 大阪市中央区伏見町 4 ― 4 ― 10
電話06（6202）0391

山　本　貴　士

朝陽電気株式会社　代表取締役

〒530-0005 大阪市北区中之島3丁目2番4号　電話06（6385）1361代表
朝日ビルディング内
〒565-0873　自宅・吹田市藤白台4丁目23番8号
電話06（6871）0851

名誉会長

佐　野　正　一

株式会社 安井建築設計事務所 代表取締役相談役

〒540-0034 大阪市中央区島町2丁目4番7号 電話06（6943）1371代
〒662-0064 自宅・西宮市雲井町4の9　電話0798（72）1569

松　原　満佐子

有限会社　柳　々　堂　　代表取締役

〒550-0003 大阪市西区京町堀1-12-3　電話06（6443）0167～8
FAX 06（6443）1826

和　中　　勝

株式会社　和　中　商　店　取締役相談役

〒531-0072　大阪市北区豊崎5丁目8番11号
電話06（6371）0731～5
〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町11-5　電話03（3464）9723
〒453-0804 名古屋市中村区黄金通3丁目34番地 電話052（481）7338
〒662-0836 自宅・西宮市大畑町10-22　電話0798（67）0386

立　成　良　三

財団法人　大阪住宅センター　理事長

〒542-0081 大阪市中央区南船場4丁目4番3号
御堂筋アーバンライフビル4F
電話06（6253）0071
FAX06（6253）0145

名誉顧問

薬　袋　公　明

日　建　設　計　　名誉会長

〒541-8528　大阪市中央区高麗橋4丁目6番2号 電話06（6203）2361



暑中お見舞申し上げます

平成16年盛夏

設計事務所有志

株式会社 伊東建築設計事務所

代表取締役　岡　本　清　彦

〒556-0016 大阪市浪速区元町2丁目12番30号 難波KIビル　電話 大阪 (06) 6646-0161(代)

株式会社 伊藤建築設計事務所

代表取締役会長　織　田　愈　史
代表取締役社長　森　口　雅　文

本社・名古屋事務所　〒460-0002 名古屋市中区丸の内一丁目15番15号（桜通ビル）電話〈052〉222-8611
東京事務所　〒101-0021 東京都千代田区外神田三丁目5番12号（聖公会神田ビル）電話〈03〉5294-6211

株式会社 瀬戸本淳建築研究室 ISO9001

代表取締役　瀬　戸　本　淳

神戸事務所　〒650－0024 神戸市中央区海岸通1丁目1－1神戸郵船ビル　TEL078－333－0138
東京事務所　〒151－0071 東京都渋谷区本町3-39-3新宿ビジネスタワー　TEL03－5302－0138

株式会社 東畑建築事務所

取締役会長　市　川　　宏
取締役社長　真　塚　達　夫

本社・大阪事務所　〒541-0044　大阪市中央区伏見町4-4-10　Tel (06) 6202-0391
http://www.tohata.co.jp
大阪・東京・名古屋・九州

日建設計

取締役社長　中　村　光　男

東京	102-8117	東京都千代田区飯田橋2丁目18番3号	電話（03）5226-3030
大阪	541-8528	大阪市中央区高麗橋4丁目6－2	電話（06）6203-2361
名古屋	460-0008	名古屋市中区栄4丁目15－32	電話（052）261-6131

コストコンサルタント　建築積算・概算・VE　建築積算システム開発

NISSEKI SURVEY

株式会社 日積サーベイ

代表取締役　生　島　宣　幸

本　　社　〒540-0012 大阪市中央区谷町3丁目1番9号 MG大手前ビル
TEL 06-6944-2755　FAX 06-6944-2390
東京支所　〒106-0041 東京都港区麻布台1-4-3 エグゼクティブタワー麻布台401号
TEL 03-5575-5045　FAX 03-5575-5046
http://www.nisseki-survey.co.jp

安井建築設計事務所

代表取締役社長　佐　野　吉　彦

本　社　〒540−0034　大阪市中央区島町2−4−7　TEL（06）6943−1371（代表）
支　社　大阪・東京・名古屋・広島・九州　http://www.yasui-archi.co.jp/

暑中お見舞申し上げます

平成16年盛夏

建設業有志

人・都市・自然のシンフォニー

Asanuma

株式会社 淺沼組

取締役社長　淺　沼　健　一

本社・大阪本店　大阪市天王寺区東高津町12番6号　電話06(6768)5222
東京本店　東京都新宿区荒木町5番地　電話03(5269)3111
名古屋支店　名古屋市中村区名駅南三丁目3番44号　電話052(571)5571
支店　北海道・東北・北関東・横浜・神戸・広島・九州

OBAYASHI

株式会社 大林組

取締役会長　大　林　剛　郎
取締役社長　向　笠　愼　二

東京本社　東京都港区港南2−15−2　電話　03(5769)1111
本　店　大阪市中央区北浜東4−33　電話　06(6946)4400
支　店　札幌・東北・横浜・北陸・名古屋・神戸・広島・四国・九州

株式会社 奥村組

取締役社長　奥　村　太　加　典

本　社　〒545-8555 大阪市阿倍野区松崎町二丁目2番2号　電話 大阪(06)6621-1101(代表)
東京本社　〒108-8381 東京都港区芝五丁目6番1号　電話 東京(03)3454-8111(代表)

100年をつくる会社

鹿島
KAJIMA CORPORATION

代表取締役社長 梅田貞夫
常務取締役関西支店長 池端 登

本　社　東京都港区元赤坂 1－2－7　電話 03(3404)3311(大代)
関西支店　大阪市西区阿波座 1－3－15　電話 06(6536)3311(大代)

人がつくる、人の場所。

SHIMIZU CORPORATION
清水建設

取締役社長 野村哲也
執行役員副社長 関西事業本部長 増島修二

本　社　東京都港区芝浦 1－2－3　電話 03(5441)1111
関西事業本部　大阪市中央区本町 3－5－7　電話 06(6263)2800

大地への愛　人間への愛

銭高組

社長 銭高一善

本　店　大阪市西区西本町2丁目2番11号
なにわ筋ツインズ　ウエスト
TEL (06) 6531－6431
本　社　東京都千代田区一番町31番地
TEL (03) 3265－4611
支社・支店　大阪・東京・北海道・東北・北関東・千葉
横浜・北陸・名古屋・神戸・広島・四国・九州
URL　http:// www. zenitaka. co. jp/

TAISEI
大成建設株式会社

社長 葉山莞児
常務関西支店長 寺下均

本　社　東京都新宿区西新宿1丁目25番1号 新宿センタービル　TEL03(3348)1111大代表
関西支店　大阪市中央区南船場1丁目14番10号　TEL06(6265)4504
ホームページ　http : // www. taisei. co. jp/

株式会社 竹中工務店

取締役社長 竹中統一

〒541-0053　大阪市中央区本町4丁目1－13　電話 大阪 (6252) 1201番(代表)

戸田建設株式会社

代表取締役社長 加藤久郎
常務取締役大阪支店長 浜辺鶴志

本　社　〒104-8388　東京都中央区京橋1丁目7番1号　TEL 東京03(3535)1354
大阪支店　〒550-0005　大阪市西区西本町1丁目13番47号　TEL 大阪06(6531)6095
支　店　東京・千葉・関東・横浜・北陸・名古屋・札幌・東北・広島・四国・九州

暑中お見舞申し上げます

平成16年盛夏

団体・報道・建材有志

社団法人 **日本建築協会京都支部**

支部長　望月秀祐

〒604-0944 京都市中京区押小路通柳馬場東入 京都建設会館別館 電話075(211)2857·2877

社団法人 **日本建築協会中国支部**

支部長　古林敏郎

〒730-0042 広島市中区国泰寺町1丁目8－4日興ビル内 TEL 082(244)2111

社団法人 **日本建築協会東海支部**

支部長　松本壮一郎

〒460-0008 名古屋市中区栄4丁目3－26(昭和ビル5階) 電話 052(261)1451

社団法人 **日本建築協会和歌山支部**

支部長　東野信義

〒640-8045 和歌山市卜半町38番地 建築士会館内 電話 073(423)2562

社団法人 **日本建築材料協会**

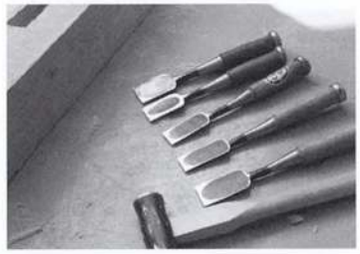
会長　藤井實

〒550-0003 大阪市西区京町堀1丁目3番13号辰巳ビル9階 電話06(6443)0345 FAX06(6443)0348
http://www.kenzai.or.jp/

建築・インテリア・大工・設備・リフォーム・土木・環境・ロボット・機械・CAD

モノづくりの学校

～Since 1895～



OCT

大阪市北区天満1丁目9番27号 〒530-0043
TEL:06-6352-0091（代表） FAX:06-6352-2861
大阪工業技術専門学校 www.oct.ac.jp ☎0120-0910-19

1955年創業 日報

建設業界でもっとも信頼　読まれている日刊情報紙

株式会社 建設日報社

社主 重村 一

本社 〒550-0006 大阪市西区江之子島1－7－3 TEL 06(6444)2405－9
別館 〒550-0006 大阪市西区江之子島1－6－2 TEL 06(6444)6431－4

YAMAMOTO YOGYO

山本窯業化工株式会社

代表取締役社長 山本泰通

本社 〒564-0051 大阪府吹田市豊津町41-20 TEL(06)6338-8601 FAX(06)6338-8606
大阪支店 〒564-0051 大阪府吹田市豊津町 8 - 7 TEL(06)6338-8701 FAX(06)6384-0557
支店・営業所 東京・名古屋・静岡・広島・福岡・仙台／福崎工場



UNION 環境を考え製品を創る 株式会社ユニオン

代表取締役 社長 立野 純三

iso 9001 iso 14001 www.artunion.co.jp

本社	大阪市西区南堀江2-13-22	〒550-0015	
大阪支店	大阪市西区南堀江2-13-22	〒550-0015	tel 06-6532-3731 fax 06-6533-2293
東京支店	東京都江東区白河2-9-5	〒135-0021	tel 03-3630-2811 fax 03-3630-2816
名古屋営業所・ショールーム	名古屋市中川区舟戸町3-20	〒454-0805	tel 052-363-5221 fax 052-363-5255
アトリエユニオン／東京	東京都中央区日本橋室町4-5-1	〒103-0022	tel 03-3517-1818 fax 03-3517-1819
アトリエユニオン／大阪	大阪市西区南堀江2-13-22	〒550-0015	tel 06-6532-8920 fax 06-6533-0224

空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59　電話06(6302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

より快適な水環境をめざして
給排水衛生設備，冷暖房設備，消火設備の設計，施工

株式会社 西原衛生工業所 大阪本店

大阪本店　〒531-0071　大阪市北区中津六丁目8番4号
TEL 06-6458-3628（代表）
本　　社　〒108-0023　東京都港区芝浦三丁目6番18号
TEL 03-3452-7441（代）
支　　店　札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋・九州

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)6441-8231
東京本社　〒102-0071 東京都千代田区富士見2丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　　社　名古屋・福岡
支　　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

CHOYO

人がいる多彩なフィールドで、
新しい限界に挑戦しています。

電気設備設計施工
朝陽電気株式会社
代表取締役　山本貴士

本　社　〒530-0005 大阪市北区中之島三丁目2-4（朝日ビル）
TEL 06(6385)1361(代)　FAX 06(6385)1050

空気調和設備　産業設備
給排水設備　水処理施設
電気設備　環境施設

三機工業株式会社
取締役社長　宅　清光
常務取締役関西支店長　本木　満

関西支店　大阪市淀川区宮原3-30 ニッセイ新大阪ビル　電話 06(6350)8100
本　　社　東京都千代田区有楽町1－4－1　電話 03(3502)6103
支　　店　北海道・東北・関東・千葉・横浜・北陸・名古屋・京都・神戸・四国・中国・九州

電気設備工事設計施工
東光電気工事株式会社
関西支社
常務取締役支社長　髙橋幸久

大阪市中央区高麗橋4丁目3番7号　電話大阪(6202)0325～9番
本　　社　東京都千代田区西神田1丁目4番5号
支　　社　北海道・東北・丸ノ内・新宿・神奈川・東関東・北関東・中部・九州

空気調和・衛生設備・設計施工

株式会社 三晃空調

本　　社　大阪市北区西天満3丁目13番20号　電話06-6363-1671
東京本店　東京都新宿区西新宿　新宿住友ビル　電話03-3344-7911
大阪本店　大阪市北区西天満3丁目13番20号　電話06-6363-1371
支　　店　仙台・横浜・名古屋・京都・神戸・広島・福岡

電気設備設計施工
株式会社 三興社
代表取締役社長　上田正雄

本　社　大阪市北区堂島浜1—4—19（日土地堂島ビル）
電話 06（6442）3671（代）
支　店　東京都中央区日本橋茅場町2丁目17番3号
電話 03（3666）1478（代）
営業所　堺・泉州・泉南・滋賀

空調衛生・冷凍冷蔵・地盤凍結
よりよき環境へ技術で挑む——
株式会社精研

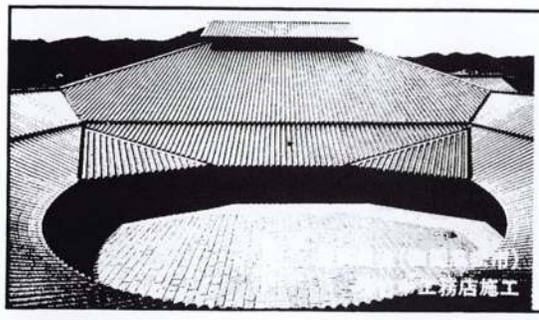
本　　社　大阪市中央区瓦屋町2丁目11番16号（オートセンタービル1・2階）
〒542-0066 電話 大阪（06）6768－5031代表
メンテナンス　電話　大阪（06）6768－1651代表
東京支社　東京都文京区小石川1丁目12番14号（日本生命小石川ビル7階）
〒112-0002　電話（03）5689－2351代表

OKUJU
スペース クリエイター

建築に革命をもたらした技術がある
「大規模天井無足場工法」

内外装創作パネル・システム天井・間仕切
株式会社 オクジュー

本　社
大阪市北区西天満5丁目3番7号　〒530-0047
TEL(06)6312-4131　FAX(06)6312-7998
東京・九州・横浜・南九州・名古屋・上海



〒556-0024
大阪市浪速区塩草一丁目二番三号
ナニワ瓦株式会社
ファックス　六五六一～七四五四
六五六一～七四一六
あらゆる屋根工事の相談は、

＊奉仕感謝の店
タイル及び規格石一式施工

株式会社 川岸窯業商店

本　　社　大阪市西区西本町1の13の33
TEL.06－6532－0641(代表)
FAX.06－6535－5181
天理営業所　天理市丹波市新町49

デンカCSAファミリー製品

●デンカCSA（膨張性混和材）　コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材）　鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント）　コンクリート躯体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材）　地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材）　コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・網野（07727）2−2220
舞鶴（0773）76−0133

金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）6332−6861
TEL 東京（03）3272−8501

小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）6443−6181

光洋物産株式会社
TEL 大阪（06）6252−6000

東郷化成株式会社
TEL 滋賀・守山（0775）83−2381
TEL 大阪（06）6877−1581

Digital Pri-Press
AOBA PRINTING CO.,LTD.,
代表取締役社長 依藤孝行
青葉印刷株式会社
〒534-0027 大阪市都島区中野町2丁目10番11号
Phone.06-6351-5428 Fax.06-6351-5299

www.naniwa.com
We have hope

■印刷事業 ポスター、カタログ、パンフレット、書籍、年鑑、社史、雑誌、文字、画像データ処理
■メディア事業 SPプランニング・コンサルティング、ITソリューション、web及びメディアコンテンツ企画制作、

株式会社NPCコーポレーション
本　社 〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19
tel:(06)6351-7271(代) fax:(06)6352-7479
第二ビル 〒530-0043 大阪市北区天満1-11-8
tel:(06)6351-0128(代) fax:(06)6351-0208
東京支社 〒105-0004 東京都港区新橋6-17-2
tel:(03)3433-5211(代) fax:(03)5776-7733
（旧社名ナニワ印刷㈱、日本データネット㈱）

YKK AP

Residence's Standerd

美しさと快適の新提案。レジデンスのための、R's シリーズ誕生



R's Window



R's Handrail



R's Steel Door



R's Entrance

基　本

基本の機能・装備を
ひときわ向上させて、
新しい標準へ。

機　転

気の利いたセンス&クオリティで
生活空間を創造する、
新しい提案へ。

毎日の暮らしをより心地よく過ごすために。
集合住宅にとっての快適性や使いやすさを基本から見つめ直し、
美しさと機能性を追求した住空間を目指しました。
永住が求められる集合住宅のために、
これからの新しい標準を提案します。

R's Series

YKK AP株式会社　本社 / 〒101-8642 東京都千代田区神田和泉町1　TEL.03-3864-2243
ビル建材第一事業部 大阪統括営業部 / 〒540-8534 大阪府大阪市中央区谷町4-8-7　TEL.06-6947-4140

建築と社会 07 2004 vol.85 no.988
社団法人 日本建築協会　〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31　電話:06-6946-6981 FAX:06-6946-6984 http://www.aaj.or.jp
毎月1回1日発行　明治24年3月19日第3種郵便物認可　ISSN 0912-8182
定価1,200円(税込)　正会員の講読料は会費に含めて徴収
雑誌 03379-7